

ディカーニカ近郷夜話 後篇

VECHERA NA HUTORE BLIZ DIKANIKI

降誕祭の前夜

青空文庫

降誕祭まへの最後の日が暮れた。冬の、よく澄みわたった夜が来た。星はキラキラと、輝やきはじめ、月は、善男善女が楽しく★カリヤードカ讚仰歌を流しまはつて基督を頌たたへることの出来るやうに、あまねく下界を照らすため、勿体らしく中空へと昇つた。寒気は朝よりもひとしほ厳しくなつたが、そのかはり、靴の下で軋きしむ凍いてた雪の音が半露里もさきまで聞えるほど物静かな夜である。まだ若い衆連の群れは民家の窓下へ姿を見せず、ただ月のみが、身支度に余念のない娘たちを一刻も早く、足もとで軋きしみ音を立てる雪の上へ駈け出させようと、誘惑するもののやうに、家々の窓をばそつと覗き込んでゐるだけであつた。ちやうどその時、一軒の民家の煙突から、一朵の煙がむくむくと吐き出されて、黒雲のやうに空へ棚引いたが、その煙といつしよに、箒に跨がった妖ウエーヂマ女が宙空へたち昇つた。

★ わたしの地方では降誕祭の前夜に、家々の窓下で『カリヤードカ』といふ歌をうたつて　　るならはしがある、それを讚カリヤードカ仰歌流しながと呼んでゐる。その流しにやつて来た者に対して、各々の家の主婦なり主人なり、そのほか、誰でも家に居残つた者が、腸詰とか、麵麩とか、銅貨といつた、うちに沢山たんとあるものを、袋の中へ投りこんでやる。なんでも昔、阿房のカリヤードカといふ者があつて、人々から神様

だと思はれてゐたさうで、この『カリヤードカ』といふ言葉はそこから生まれたと
のことだ。だが、誰がそんなことを知つてゐるものか。こちとら如き凡俗の彼はい
ふべき筋合ではない。昨年、オーシツプ神父は、悪魔の機嫌を取るようになるから
と言つて、村々を流してまはることを禁止しようとした。だが、本当のことを言へ
ば、カリヤードカ讚仰歌の中にはそのカリヤードカといふ人物のことは一言半句も詠み込まれて
はをらぬ。よく唄はれるのは基督降誕の讚歌で、最後にその家の主人、主婦、子供
など全家族の健康を寿ぎ祈つて歌を終るのである。(蜜蜂飼註)

この時、もし、仔羊皮の縁へりをつけて鎗騎兵型に仕立てた帽子に、裏に黒い毛皮をつけた
紺色の外套を著こんだソロチンツイの陪審官が、いつも馭者を追ひ立てるのに使ふ、おそ
ろしく器用に編んだ革鞭を手にして地方ところの馬をつけた三頭だての櫓に乗つて通りかかつた
としたら、まさしくその妖ウエーヂマ女を見つけたに違ひない、このソロチンツイの陪審官の眼
を誤魔化すことの出来る妖ウエーヂマ女は広い世界にただの一人もゐない筈だから。彼はどの女
の家では豚が幾匹仔を産んだとか、どの女の葛籠つづらには麻布ぬのがどれだけ入つてゐるとか、ま
た堅気な男が祭りに衣類なり家財なりの何品なにをいつたい酒場へ抵当かたに置いたとかいふこと
を、細大漏らさず知つてゐる。しかしソロチンツイの陪審官は通らなかつた。それに他所よそ

のことなど彼には用がなかつた——彼は自郡のことに忙殺されてゐたのだ。ところで、その間にも妖女ウエーヂマはぐんぐん高く昇つて、今はただ一つの黒い小さな点となつて上空にチラホラ隠見してゐるだけである。だがその斑点が姿を現はすたんびに其処にあつた星が次ぎ次ぎと消えて亡くなつた。間もなく妖女ウエーヂマはそれらの星を袖にいつぱい集めた。後には星はもう三つ四つしか光つてゐない。と、反対側の方角から別の斑点が一つ現はれて来た。だんだんそれが大きくなり、伸びひろがると、それはもう斑点ではなかつた。近眼ちかめの人には、たとへ眼鏡の代りに警察部長の乗る馬車の輪を鼻に掛けたところで、それがいつたい何者なのか見分けることは出来なかつたらう。前から見ればてつきり★独逸人で、その、ひつきりなしにヒクヒクと動いて、鼻の先きへぶつかつたものなら何によらずクンクン嗅ぎまはさずには措かぬ鼻づらは、ちやうど豚の鼻のやうにまんまるな五哥銅貨型カペイカをしてをり、その脚と来ては至つて細く、こんな脚を、あのヤレスコーフ村の村長がもつてゐたなら、最初の哥薩克踊カザチヨークで挫いてしまつたことだらう。ところが、後ろから見ると、まるで制服を著けた梟の陪審官そつくりなのだ、といふのは、当今の制服の裾と同じやうな、ツンと尖つた長い尻尾がさがつてゐたからで、ただその口の下に垂れた山羊髯や、頭から突きでた小さい角をみれば無論のこと、五体が煙突掃除人よりも黒いところから推して、

それが独逸人でもなければ、県の陪審官でもなく、もはや今宵ひと夜しか、この地上を徘徊して、善良な人間を誑かして罪に曳きこむことのできない、悪魔に他ならぬことは、たやすく知ることが出来た。あしたになれば、早朝の祈祷の最初の鐘の響きと共に、彼は尻尾をまいて、一目散におのが洞窟へ逃げこまねばならないのだ。

★ 小露西亞では他国人のことを、それが仏蘭西人であらうと伊太利人であらうと乃至は瑞典人であらうと、総て一様に独逸人と呼んだものである。（蜜蜂飼註）

この間にも悪魔はだんだん月の傍へ忍び寄つて、今にも手を差しのべてそれを掴まうとしたが、急に手をひくと、火傷でもしたやうに指を舐めて、足をバタバタさせた。今度は反対側から飛びかかったが、又もや飛びのいて手を引つこめた。だが、再度の失敗にもめげず、狡獪な悪魔はその悪戯をやめなかつた。やがて、不意に駈けよりぎま、彼は両手で月を掴んだ。そして、ちやうど百姓が煙草を吸ひつけようとして素手で燠おきを持った時のやうに渋面を作つてフウフウ息を吹きかけながら、月をこちらの手からあちらの手へと持ち換へ持ち換へしてゐたが、しまひに大急ぎで衣囊かぶしの中へ押しこむと、もう何事もなかつたやうな顔で、さきへ駈け去つてしまつた。

悪魔が月を隠したなどは、ディカーニカでは誰ひとり知る者がなかつた。尤も郡書記

が酒場から四つん這ひになつて這ひだしながら、月が空で矢鱈に踊つてゐるのを見かけたので、そのことを村中の者に誓ひを立てて言い張つたけれど、村民は首を横にふつて、そのうへ彼を嘲笑ひさへした。だが悪魔がこんな無法なことを企らんだのは一体どういふ訳があつてだらう？ それはかうだ。彼は分限者のチューブといふ哥薩克が、補祭の家へ＊
クチャ蜜飯に招ばれてゐることを知つてゐた。そこへは村長や、大僧正つきの唱歌隊から戻つて来てゐる、青いフロツクを著て、低音の最低音部を勤める、スウエルブイグーズといふ、
 補祭の縁つづきの哥薩克や、まだ誰や彼やが招ばれてゐる筈だ。また其処では蜜飯のほかにワレヌーハ混合酒や、さふらん泊天藍を浸けたウオツカ火酒や、まだそのほかいろんな料理が出るに違ひなかつた。さうすると、チューブの娘で、村一番といふ美人が、一人で家に残ることになる。さうなれば間違ひなくこの娘のところへ、悪魔にとつてはコンドウラト神父の説教よりも苦手の鍛冶屋が忍んで来るにきまつてゐる。そいつは恐ろしく腕つ節の強い素晴らしい若者なのだ。この鍛冶屋は仕事の合間々々に塗師ぬりしの仕事もして、この界限ではなかなか上手な画工だといふ評判だつた。まだそのころ達者だつた百人長ソートニツクのル××コもわざわざポルタワへ彼を呼んで、邸のまはりの板塀を塗らせたものだ。ディカーニカの哥薩克どもがボ雑ルシチ汗をすすする鉢はみんなこの鍛冶屋が彩色をするのだつた。この鍛冶屋は信心ぶかい男で、

幾度も聖者の御像を描いた。で、現今いまでもT×××寺院には彼の筆になる福音書の使徒ルカの像が残つてゐる。しかし彼の入神の技ともいふべきものは、会堂の右側の、外陣の壁に懸つてゐる一幅の絵である。その絵には、鍵を手にして悪魔どもを地獄から追ひ出してゐる、最後の審判の日の聖ペテロが描かれてゐる。身の滅亡に直面して周章狼狽した悪魔どもが四方八方へもがき　　るのを、先きから監禁されてゐた亡者たちが、笞や、木切れや、そのほか手当り次第の得物で打擲しながら追ひ　　してゐる図である。この画工がその絵に精根を打ち込んで、大きな木の板の上に画筆を揮つてゐる最中に、悪魔は懸命にそれを妨害しようとして、人知れずその手をつつ突いたり、鍛冶場の竈から燃え殻を吹き揚げて画面へまき散らしたりなどしましたが、すべてが無駄にをはつて、その絵は立派に出来あがり、寺院へ運ばれて、外陣の壁へ嵌めこまれた。この時以来、悪魔は鍛冶屋に復讐しかへしをしようと心に誓つたのだ。

クチャ 蜜飯　乾葡萄や蜂蜜を混じて炊いた飯様の食品で、死者の供養直後、または降誕祭の前夜等に食するもの。

だが、もはや彼が地上を徘徊することの出来るのも、剩すところ一晚きりだ。今夜こそは何とかして鍛冶屋に対する日頃の鬱憤を晴らさにやならぬと思つて、隙を狙つてゐたの

だ。さてこそチューブ老人が億劫がつて出かけ洩るやうにと、月を隠してしまつた訳だ。補祭の家まではかなりな道のりでもあり、そのまた道が裏道で、磨粉場こなひきはや、墓地の傍をとほつて谷を一つ迂ワしなければならぬと来てゐる。月夜でもあればまだしも混合ワレヌー酒ハや泊天藍入りの火酒ウオツカがチューブを誘ひ寄せもしたであらうけれど、こんな暗夜に彼を煖炉ベチカから引き離して、家からおびき出すことはちよつと誰の手にもをへることではなかつた。ところで、鍛冶屋はこの老人とは日頃から気合そりがあはなかつたので、腕うでつ節の強いにも似ず、父親のゐる時に娘のところへ出かけるなどといふことは先づなかつた。

そんなわけで、悪魔が衣囊かぶへ月を匿すと同時に、急に全世界が真暗まつくらになつてしまつたため、補祭のところは愚か、酒場へ行く道もおいそれとは見わたることが出来なかつた。

妖女ウエーヂマは不意にあたりが暗くなつたのを見て、あつと叫び声をあげた。悪魔はすかさずじやらつくやうにそばへ近よつて妖女ウエーヂマと腕を組んで、その耳に口をよせると、人なみに情婦に向つて言ふやうな、紋切型の口説を夢中になつて囁やきだした。実にこの世の中といふやつは奇妙に出来てゐる！ この世に住んでゐる限りの者が互ひに見やう見真似に憂身をやつしてゐるのだ。以前、ミルゴロドでは判事と市長だけが多分、羅紗の表をつけた毛皮外套トウループを著てゐただけで、他の一般の下級官吏は、普通の、表なしの品より他は用ゐ

なかつたものだ。それが当今ではどうだ、村役人や倉庫番までが*レシエティロフ産の毛皮に、羅紗の表を附けた大外套シユーバを新調しをる。事務員や、郡書記でさへも一昨年あたりは、一アルシン六十哥カベイカもする青い支那絹を買ひ込みくさつた。寺男までが南京織の夏ズボンと、縞目のある手編のチョツキを新調しをる。一口にいへば、誰も彼もが見やう見真似をしたがるのだ！ いったい何時になつたら人間は、かうした余計なことに齷齪しなくなるだらう！ とところで悪魔までが矢張りさうした見やう見真似に憂身をやつしてをる処を見るのは、大抵の人々にとつては確かに面白いことに違ひない。それは賭をしてもいいくらゐだ。何より片腹痛いのは、あの見るのも恥かしいやうな不態な恰好をしてゐながら、奴さん自分をいつぱしの優男と思ひこんでゐるらしいことだ。フォマ・グリゴリーエキツチの言ひ草ではないが、穢らはしいにも穢らはしい、醜悪そのもののやうなあの御面相で、情事いろごとに憂身をやつさうなんて、いやはやだ！ だが、天も地も一様に真暗になつてしまつたので、悪魔と妖ウエーヂマ女とのあひだに一体それからどんないきさつが持ちあがつたかは、もはや知る由もなかつた。

レシエティロフ ボルタワ県下の町で、ゴツトワ河の沿岸に位し、毛皮の産地として有名なところ。

*

*

*

「ぢやあ、教父とつつあん、お前は、まだ補祭がとこの新家へは行かなかつたのかい？」と哥薩克のチューブが自分の家の戸口を出ながら、短かい皮外套を著た、瘦せて背のひよろ長い相棒の百姓に声をかけた。その男の髯もぢやな顔は、もう二週間以上、よく百姓たちが剃刀を持ち合はせてゐないところから髯を剃るのに使ふ、あの鎌の破片かけも当てられてゐないことを物語つてゐた。「今夜あすこで、素晴らしい酒さかもり宴もりがあるだよ！」と、茲でにやりと笑顔を見せてチューブは語りつづけた。「どうかまあ、遅参にならなきやあよいがのう！」

そこでチューブは皮外套の上からしつかり緊めてゐた帯をなほして、帽子をぐつと目深に引き上げると、煩さい野良犬を嚇すための鞭を手に握つた。だが、空を見あげて、思はず彼は足をとめた……。

「これあ、いつたい、なんちふことだ！ おい見ねえ！ 見ねえつたら、パナース！……」
 「なんだね？」と言つて、教父クームも同じやうに空を見あげた。

「なんだぢやあねえや、お月さまが無くなつたでねえか！」

「はあて、面妖な！ ほんに、お月さまがねえや。」

「だから、ねえつていふのさ！」チューブには教父クームの相も変らぬ暢気らしさが、少し忌々しかつた。「お前にやあ、いつかうに構はなささうぢやけれど。」

「だといつて、おらにどうしやうがあるだよ？」

「これあ、てつきり、なんだよ、」と、袖で口髭を拭きながらチューブが言葉をついだ。

「どこかの悪魔の奴めが——そんな畜生にやあ毎朝一杯づつの火酒ウオツカも吞まれなきやあええだ！——邪魔をしくさるのに違えねえだ！……ほんに、人を小馬鹿にしやあがつて……。

家んなかにをる時、わざわざ窓から見れあ、殊の外にええ晩ぢやねえか！ 明るくて、雪は月の光りにピカピカと光つてまるで昼間のやうに何もかもよく見えたつけが。それが一ひ

歩とあしそとへ出るとどうぢや、まるつきり眼を刮りぬかれでもしたやうでねえか！ ちえ

つ、ほんとに、カチカチに干からびた黒麵麩でそんな畜生の齒が残らず折れてしまへばええ

！
—

チューブはなほも永いあひだ、ブツブツ不平を言つたり、悪態をついたりしてゐたが、それと同時に肚の中では、さてどちらに決めたものかと思案にかき暮れてゐた。彼には、

補祭の家へ行つて、いろんなくだらな駄弁を弄するのが死ぬほど楽しみだつた。あすこには方に一つの間違ひもなく、もう村長が来てゐるだらうし、新来の低音歌手バスウタビも陣どつてゐるだらう。また、二週間おきにポルタワの市いちへ出かける煙脂屋タバールで、村の連中が腹の皮をよるやうな冗談や駄洒落を連発するミキータも坐つてゐることだらう。チューブの眼にはもう、食卓のうへに出てゐる混合酒ワレヌーハの罫がまざまざと見えるやうだつた。さうしたことを思ふと彼の心はうづうづしたが、この夜の暗さに面と向ふと、つい凡ての哥薩克には共通な、例のものぐさの癖が頭をもたげた。今ごろ煖炉ペチカの寝棚のうへで足を縮こめて寝そべりながら、静かに煙管を啣へたまま恍惚たる夢心地で、窓下へ寄りたかつて来る陽気な若い衆や娘つこ達が唄ふ祭り歌を聞いてゐたら、どんなに好いだらう！ 彼は自分ひとりだつたら、てつきりもうそれにきめてしまつたのだが、今は二人づれのこととて、暗い夜道を行くのが、さほど億劫でもなければ、怖ろしくもなく、それにどちらかといへば、他人ひとから無精者だの臆病者だのと思はれたくもなかつた。そこで悪口を叩くのをやめて、再びクーム教父の方へ向きなほつた。

「のう、教父とつつあん、お月さまは無えてのう？」

「無えだよ。」

「奇態なことだよ、まつたく！ 時に煙草を一服くんなよ！ 教父つあん、お前の煙草はえらく上物だのう！ どこで買ふだね？」

「なんの、上物なもんか！」と教父は、飾り縫ひをした白樺皮の嗅煙草入の蓋をしながら、答へた。「ちいと年をくつた牝鶏なら、噓みひとつするこつてねえだ！」

「おら今でも憶えてをるが、」と、同じ調子でチューブが話しつづけた。「あの、おつ死んだ酒場の亭主のズブリーヤが一度、ニエージンの市まちから煙草を土産に持つて来て呉れたつげが、それあ素晴らしい煙草だつたわい！ とてつもない上等の煙草だつたぜ！ 時に、教父つあん、どうするね？ そとは真暗ぢやねえかい。」

「ぢやあ、いつそ家うちにをることにしようか。」と、扉の把手とつてを握りながら、教父が答へた。もし教父がさう答へさへしなかつたら、てつきりチューブは出かけることを思ひとまつたのだが、かう言はれると、まるで何かに唆かされてもしたやうに、意地づくでも出かけるやうといふ氣になつたものである。「うんにや、教父つあん、行かうや！ なあに、行かいでか！」

かう言つてから、すぐに彼は自分で自分の言つたことを忌々しく思つた。こんな晩にそとへ出かけるのは酷くいやだつた。だが、自分がどこまでも我がを通して、他人ひとの助言に盾

をついて押し切つたことがせめてもの心遣りだつた。

教父は、家に坐つてゐるようが、外へ出かけようが、それはどちらだつていつかう構はな
 いといつた様子で、これつぱかしも厭な顔をせずに、あたりを見まはしながら相棒の杖で
 自分の両肩をこすつたものだ。——そこで二人の教父同士はややをら往来へと出て行つた。

*

*

*

ところで今度は、一人きり家に残された小町娘が一体どうしてゐるか、それをひとつ覗
 いて見ることにしよう。オクサーナはまだ十七にはなつてゐなかつたが、デーカーニカの
 界限では、まるで世間ぢゆうが、寄るときはると、この娘の噂さで持ちきりだつた。若者
 たちは彼女のことをこの村はじまつて以来、第一の美人で、今後とてこれほどの美人は決
 して生まれつこないだらうとまで褒めそやした。オクサーナはかうした評判を残らず耳に
 留めて知つてもゐたし、美人にはあり勝ちのやんちやでもあつた。もしも彼女が下著に
 下袴サバースカといつた服装なりではなく、せいぜい自宅着カポートでも身に著けて出歩かうものなら、他の
 娘といふ娘の影は忽ち薄れてしまつたことだらう。若者たちは競つて彼女の後をつけまは

したものだが、次第にこの美女の気紛れに我慢がなくなつて、しまひには一人二人と彼女を離れて、それほど我儘でない他の娘へと移つて行つた。ひとり鍛冶屋だけは、彼とても他の連中よりどれだけ好い待遇を受けてゐる訳でもなかつたけれど、飽くまで強情に付き纏ひとほした。父親が出かけて行つてからも、オクサーナは長いあひだ、錫の縁を嵌めた小さい手鏡の前でおめかしをしたり、容子を作つたりして、われと我が姿に飽かず見惚れてゐた。

みんなはどうしてあたしを美人だなんて言ひはやすんだらう？ かう、ただ何か独りごとを言つて見るだけで、別になんの気もなささうに彼女は眩やくのだった。みんな嘘ばつかり言つてるんだわ。あたしなんか、ちつとも美しくはないわ！

しかし、黒目勝な眼を輝やかして、魂の底まで焼きつくすやうな、得もいはれぬ快よい微笑を浮かべながら、鏡の中にチラと映つた、瑞々しく生気を帯びて、どこかあどけなく若々しいその顔は、立ちどころに正反対の事実を証拠だてた。

ほんとに、こんな黒い眉と眼とがさ、と、鏡を手離さうともせず、彼女はつづけた。世界ぢゆうに又と無いほど綺麗なのかしら？ こんな、天井を向いた鼻の何処が好いんだらう？ こんな頬ぺたや、こんな唇の何処がいいのかしら？ こんな黒い編くみがみ髪がどう

して素敵なんだらう？　ワーツ、日暮れに人が見たらぞつとするわ、だつて、この編髪くみがみつたら、まるで長い長い蛇がとぐろを巻いたやうに、あたしの頭にぐるぐる巻きついているんだもの。さうよ、あたしなんかちつとも綺麗ぢやないわ！　だが、また鏡を少し顔から離して見て、かう叫んだ。　ううん、やつぱりあたし綺麗だわ！　まあ、なんて綺麗だらう！　素敵だわ！　あたしをお嫁にする人はほんとは幸福しあはせなものよ！　あたしの良人がどんなに惚れ惚れとあたしを眺めることだらう！　嬉しさの余り、きつと夢中になつてしまふわ！　屹度、あたしを死ぬほど接吻するわ！

素敵もない娘つこだ！　と、こつそりそこへ入つて来た鍛冶屋が口の中で呟やいた。　それになんちふ自惚の強い女だらう！　一時間も立てつづけに鏡を覗いてみて、それでもたんのうしないで、おまけに聞えよがしに自惚を言つてやあがる！

ほんとに、若い衆さんたち、あんた方があたしを相手に出来る柄だと思つて？　よくまあ、あたしを見てお呉れ。　美しい蓮葉娘はかう独り言をつづけた。　あたし、とてもすんなりしたいでたちでせう。この肌着には赤い絹糸で刺繍ぬいがしてあつてよ。それに頭のりボンはどうを！　あんた方が逆立ちをしたつて、こんな立派な打紐を見ることは出来なかつてよ！　これはみんな、あたしが世界中で一番立派な花婿と結婚ができるやうにつて、

お父さんが買つて呉れたんだわ。ここでニツと笑つた娘は、不意に後ろを振り向くと、そこに立つてゐる鍛冶屋を見つけた……。

彼女はあつと声をあげたが、いきなり男の前に傲然と立ちはだかつた。

鍛冶屋はたじたとつた。

この素晴らしい美女の浅黒い顔に現はれた表情を説明することは難かしい。その面持は峻烈な色を湛へてゐたが、その峻烈さの中には、まごまごしてゐる鍛冶屋に対する擲揄の情が窺はれもした。そして微かにそれと見える、怨みをこめた紅潮が、ほのかに顔ぢゆうに溢れてゐた。それらがごつちやになつた、得もいはれぬ美しきに対しては、ただこの場合、百万遍も接吻をして呉れるより他には手の施こしやうがなかつた。

「どうしてあんた、ここへ来たの？」そんな風にオクサーナが切り出した。「あたしにシヤベルで戸の外へ追ひ出して貰ひ度いとしてもいふの？ほんとにあんた達は、そろひもそろつて、忍びこみの名人ばかりだわ。お父^{とつ}つあんの留守をすぐに嗅ぎつけるんだもの。ええ、あたし、ちやんとあんた達のことは知つててよ。それはさうと、あたしの長櫃^{スンドウケ}はもう出来て？」

「ああ、出来あがるよ、祭すぎには出来あがるよ。おれがどれだけあれに骨を折つたか知

つて貰へたらなあ！ 二た晩といふものは仕事場から一步も外へ出なかつたんだぜ。その代り、あれだけの長櫃はどんなおだいこく 梵妻のところにだつてありつこなしさ。上張りの鉄板てつなんざあ、おれがポルタワへ出仕事に行つたをり、百人長の二輪馬車ソートニツクに張つたのより、ずつと上物なんだぜ。それにどんな彩色ぬりに仕上がると思ふね？ まあその可愛らしい白い足でこの界限を残らず捜しまはつて見るがいいや、とてもあんなのあ見つかりつこないから！ 赤や青の花をベタ一面に撒き散らすのだけ。赫つと燃えるやうな美しさに出来あがらあ。さう、つんつんしないでさ！ せめて話だけでもさせてお呉れよ、せめて顔だけでもお 拝ませしてお呉れよ！」

「だあれもいけないつて言やしないわ。勝手に話すなり眺めるなりしたらいいぢやないの！」

そこで娘は腰掛に坐ると、またしても鏡を覗きながら、頭の編くみがみ髪をつくろひにかかつた。彼女は頸筋をのぞいたり、絹糸で刺繡ぬひをした肌着を眺めたりしたが、微妙な自己満足のいろが、その口もとや、瑞々しい頬のうへにあらはれて、それが両の眼に反映した。

「おいらにもお前めえのそばへ掛けさせてお呉れよ！」と、鍛冶屋が言つた。

「お掛けなさいな。」さう、口もとど、満足さうな両の眼とに同じやうな情を湛へながら、

オクサーナは答へた。

「ほんとに美しい、いくら見ても堪能の出来ないオクサーナ、ちよつと接吻させとくれよ！」思ひ切つてかう言ふと、鍛冶屋は接吻するつもりで女を自分の方へ引きよせた。しかしオクサーナは、もう鍛冶屋の唇とすれすれになつてゐた頬を、つとそらして、男を突きつけた。

「まあ、この人は何処までつけあがるのだらう？ 蜜をやれば、匙まで呉れつて、あなたのことよ！ あつちへ行つて頂戴。あなたの手は鉄より硬いわ。それにあなたは煙きなくさ臭くつてしやうがないんだもの。屹度あたしを煤だらけにしてしまつたかもしれないわ。」

さう言つて鏡を取りあげると、またしても彼女は男の前でおめかしをやり出した。

この女はおれを好いてゐないんだ！ と、首うなだれて、鍛冶屋は肚のなかで考へた。

この女には何もかもが玩おもちゃ具なんだ。それだのおれは、この女の前へ出ると間抜けみたいに突つ立つたまま、脇へ眼をそらすことも出来ないのだ。この後もやはり、この女の前に突つ立つて、一生この女から眼を離すことが出来ないだらう！ 素晴らしい娘だ！

一体こいつが誰を愛してゐるのか、この女の胸のなかを知ることが出来たら、おれは何を投げ出したつて構やしない。だがさつぱり分らない、どだいこの女は人には用がないの

だ。自分で自分にばかり夢中になつてゐて哀れなおれを焦らしてやがるのだ。おれの悲しみには何の光明もない。それでゐておれはこの女を、後にも先きにも誰ひとり愛したことはないやうな熱烈な想ひで愛してゐるのだ。

「あんたとこのお母さん、つか妖女だつてほんと？」さう言つて、オクサーナが笑ひだした。すると鍛冶屋も肚のなかからほほ笑まれて来るやうに感じた。その笑ひが心臓に反応し、微かに波だつ血管へと伝はつた。それについて、このやうな氣持の好い笑ひを浮かべた顔を、存分に接吻することの出来ない口惜しさが彼の心をとぎした。

「阿母おふくろなんかどうだつていいさ。おれにとつてはお前が阿母おふくろでもあれば、親父おやぢでもあり、この世の中にある限りの大事なものだもの。もしも皇帝ツァーリがおれを呼び出して、鍛冶屋のワクーラ、そちにとつてこの国ぢゆうでいちばん貴重なものを言つて見よ、何でも望みのものをそちに遣はすから。そちのために黄金こがねの鍛冶場を建てて取らせようか、そして銀の鎚で鉄を鍛へさせて遣はさうか？ と仰せられたとしても、おれは、そのやうな望みはござりませぬ。と皇帝ツァーリにお答へするよ。宝玉も、黄金の鍛冶場も、陛下の皇国みくに全体も要りませぬ。それよりも、オクサーナをば遣はしなされませ！ つてな。」

「あんたも、ずるぶん隅におけないわね！ でも、うちのお父とつつあんだつてなかなかの凄

腕よ。見ていらつしやい、今にあんたとこのお母さんと結婚するから！」かうオクサーナは、狡さうに笑ひながら言つた。「それはさうと、みんなはなぜやつて来ないんだらう……。いつたいどうしたといふのだらう？　もう疾つくに流しに出かける時間なのに、あたし退屈しちやつたわ。」

「あんな連中のことあ、どうだつていいぢやないか、おれの別嬪さん！」

「さうでもないわ！　あの人たち、きつと若い衆をつれて来るからさ。さうしたら舞踏会だつて出来るんだもの。どんなにおもしろい話が出ることだらう！」

「そんなにお前は、あんな連中といつしよに騒ぐのが面白いのかい？」

「それあ、あんたといつしよに、かうしてゐるよりは面白いわ。あら！　誰だか戸を叩いてゐるわ。きつとみんなが若い衆といつしよに来たんだわ。」

何をこれ以上あてにすることがあらう？　と、鍛冶屋は胸に問ひ肚に答へた。この女はおれを黽つてゐるのだ。この女にとつてはおれなんざあ、錆びくちた蹄鉄ほどの値打もないのだ。しかし、それならそれで、少くとも他の奴らにおれを嘲けらせはせんぞ。おれ以上にこの女の氣に入つてゐる奴が、はつきり分つたが最後、そいつに思ひ知らして呉れるから……。

戸を叩く音と、寒気の中につんざくやうに響く 開けて呉れ！ といふ声が、彼の思索の糸を断ち切つた。

「待て待て、おれが開けてやらう。」さう言つて鍛冶屋は立ちあがつたが、忌々しさのあまり相手が誰だらうと出会ひ頭の野郎の横つ腹に風穴をぶちあけて呉れようと思ひながら、表口へ出て行つた。

*

*

*

寒気がひとしほつりの、空もひどく寒くなつてきたので、悪魔は蹄のある足を代る代る跳ねあげたり、かじかんだ手を少しでも暖めようと拳に息を吹きかけたりした。だが、この世の冬ほどには寒くない地獄で、ちやうど料理店のコック頭のやうに、白い帽子をかぶつて竈の前にたたずみながら、降誕祭の用意に腸詰を煮る女房かみさんのやうな満足らしい顔つきで、亡者を焙る悪魔に、嚴冬の寒さのこたへるのは不思議でも何でもない。

ウエーチマ
妖女

女の方も、温かい服装みなりはしてゐたけれど、なかなか寒いと思つた。それで、両手を左右にひろげて、片方の足を後ろへ引き、ちやうどスキーを履いて滑走する人のやうな

姿勢をとり、全身の節々をしゃんと伸ばして、まるで氷の急坂を迂りおりるやうに、空中を真一文字に、わが家の煙突さして飛翔した。

悪魔もやはり同じやうにしてその後を追った。この生きものは、*靴下を穿いたどんな洒落者よりも遙かに敏捷だったから、煙突の口のところまで自分の情婦の首つ玉へ飛び乗つてしまつたのも不思議はない。かうして彼等は、広々とした煖炉ベチカのなかの、壺や瓶の間に姿を現はした。

靴下を穿いた洒落者 往時、一般の露西亜人は靴下と称すべきものを用ゐず、ぼろ切れを足に巻きつけて長靴を穿くのが普通であつたから、靴下を穿くほどの人間といへば、法外な洒落者といふことになる。また当時でも猶太人のみは靴下に短靴といふ軽装をしてゐたから、茲にもその意が含められてゐると見てよい。

空の旅から戻つた 妖ウエーデマ女はそつと焚ザスロインカ口扉をずらして、わが子のワクーラがお客を家の中へつれこんでをりはせぬかと、ちよつと覗いてみたが、部屋の真中に置かれた二つ三つの袋の他には誰ひとり人影のないのを確かめると、のこのこと煖炉ベチカから這ひだして、温かさうに著ぶくれた 裘コジューフ衣フを脱ぎ捨てて服装みなりをなほした。で、一分間まへまで彼女が箒

に跨がつて空を飛翔とびまはつてゐたなどとは、誰にも思ひもよらなかつた。

鍛冶屋ワクーラの母親は年のころ四十を幾つも出てゐなかつた。その容色はすぐれて美しくもなければ、醜くもなかつた。尤もこの年配で美貌をたもつといふことは困難だが、それでゐて彼女は、この上もなく生真面目な哥薩克連（尤もこの手合にとつては容色などは二の次ぎのことであつたが）を、うまうまと蕩しこんでゐたので、村長や、補祭のオーシツプ・ニキーフオロキツチ（言ふまでもなく、それはおだいこく 梵妻の不在の時に限るのだが）や、哥薩克のコールニイ・チューブや、カシヤン・スウェルブイグーズが彼女の家へせつせと通つたものだ。それに、これは彼女の最も名譽とすべき事柄であるが、彼女はこの連中を実に巧みにあやなす術てを心得てゐたので、彼等のうち誰ひとり、自分に競争者があらうなどとは夢にも考へてゐなかつた。信心深い百姓にもせよ、自から貴族と名乗る哥薩克にもせよ、頭中の附いたマントを著込んで、日曜日にお寺へ詣るとか、または天氣が悪くて酒場へでも行くとかすれば、ついでにソローハのところへ立ち寄つて、スメターナ 凝乳をべつとりつけた肉団子フレニキを食ひながら、暖かい家の中で、おしやべりで愛想のいい女主人と喃む語つことを交はすのが悪からう筈はない。その癖、貴族連は、酒場へ行く前にわざわざまはり道をしておきながら、とほりすがりにちよつと立ち寄つただけで、などと言ひわけをした

ものだ。また祭日などにソローハが派手な毛織下着ブラフタに、南京織の下袴ザパースカを穿き、その上にうしろに金糸で触角ひげの形の刺繡ぬひをした青いスカートを著けて、お寺へ出かけて、右側の頌歌席にほど近く立たうものなら、補祭はさつそく咳払いをしたり、そちらへ向けて眼ませをしたりするのが常で、また村長は口髭を撫でたり、房チューブ髪を耳に捲きつけたりしながら、隣りに立つてゐる男にかう囁やいたものだ。『へつ、何ちふがつちりした好え女だらう！ 凄え女だ。』ソローハはめいめいに会釈をした。するとこちらは、自分だけに女が挨拶をしてくれたのだと思つて悦に入つたものである。

しかしながら、他人ひとごとにおせつかひ好きな人はたちどころに、ソローハが誰よりも哥薩克のチューブに対して一段とちやほやしてゐることに気がつくだらう。チューブは鰐やもめだつた。彼の家の前にはいつも八つの穀堆がならんでゐた。四匹の頑丈さうな去勢牛が、いつ見ても納屋の籬ませがき垣かきから往還へ首を突きだして、戸外そとをとほる牝牛の小母さんや、肥つた牝牛の小父さんの姿を見つけると、もうもうと啼き立ててゐた。顎鬚を生やした山羊は納屋の屋根の上へ登つて、そこから市長の声に似た甲高い嗶がれ声を振りしぼつて、庭を横行する七面鳥をからかつたが、いつも自分の鬚にわるさをする強敵——腕白小僧たちの姿を見ると、逸早く、くるりと尻を向けた。またチューブの家の長持の中には夥しい布地

や、波蘭服ジユパーンや、金モールのついた古風な波蘭婦人服クントウーシユなどがぎつしり詰まつてゐた。死んだ女房が衣裳ずきのおしやれだつたからだ。野菜畠には、罌粟や甘藍や、向日葵のほか、毎年ふた畑の煙草が播かれた。ソローハはもう早手まはしに、それらが残らず自分の身上と一緒になつた暁には、どういふ風に整理きりもりをしようかなどと、内心ほくほくと胸算用をしながら、一倍とチューブ老人にちやほやしたものである。ところが、どんなことで悴のワクーラが、チューブの娘に言ひ寄つて財産全部をわがものにしてしまはないものでもない、さうなつたら、こちらには何ひとつ手出しをさせないにきまつてゐるから、彼女はあらゆる四十女の常套手段に訴へて——チューブと鍛冶屋とに出来るだけ何度も喧嘩をさせたのである。多分かうした彼女の狡獪邪智に長けた点がわざはひして、あちこちで、口さがない老婆連に、とりわけ何か賑やかな寄合などで余計なものでも呑んだりした折に、ソローハはてつきり妖ウエーチマ女だなどと言ふ噂を立てさせたものに違ひない。そればかりか、ギジャコルペンコといふ若者が、彼女のお尻に女の使ふ紡つむくらの大きな尻尾のあるのを見たのだ、まだつい先々週の木曜日のこと、彼女が黒い猫に化けて道を走つて行つたのだ、コンドウラト神父の梵おだいこく妻のうちへ豚の姿で飛び込んで雄鶏とりの鳴き声をあげておいて、神父の帽子を頭にかぶりざま、もと来た方へ駈け去つただのと……。

偶々さうした噂話で婆さん連が井戸端会議を開いてゐるところへ、牛飼のトウイミーシユ・コロスチャーウイといふ男が来合はせたことがあつた。彼はすかさずこんな話を持ちだした。なんでも夏のこと、*聖彼得齋節ペトロフキの前だつたが、彼が牛小舎の中で一と眠りしようと思つて、藁を掻き寄せたのを枕にして横になつてゐると、現在その眼にまざまざと、もとどり※を振り乱した、肌着ひとつの妖女ウエーチマが牛の乳を搾りだしたのが見えるのだけれど、彼は身動き一つすることも出来ない——呪術まじなひにかけられてしまつてゐたのだ。そして何か、いやに胸の悪くなるやうな物を口に塗りたくられたので、その後で一日ぢゆう、睡ばかり吐いてゐたといふのだ。だが、どうもかういふ話はどれもこれも信用が置けさうにない。何しろ、妖女ウエーチマを見ることの出来るのは、ソロチンツイの陪審官より他にはない筈だから。そんなわけで、名うての哥薩克連は誰も彼もさういふ噂話を耳にすると、手を振つた。『牝犬どもめが、つべこべと嘘八百を並べやがつて！』さういふのがいつもきまつて彼等の応酬であつた。

聖彼得齋節ペトロフキ 使徒ペテロ及びパウロの祭礼に先だつ精進期、復活祭後第九週より

六月二十九日（旧露曆）までの期間をいふ。

それはさて、煖炉ベチカから這ひ出して身繕ひをしたソローハは、殊勝な女主人かみさんのやうに物を

とり片づけたり、在るべき場所へ置きなほしたりし始めたが、家の中におつぽり出されてゐた袋には手も触れなかつた。これはワクーラが持つて来をつたのだから、あれが自分で片附けるがいい！ また一方、くだんの悪魔は、さつき、まだ煙突めがけて飛行しながら、チューブが教父クームと腕をくみあつて、もうかなり家から遠く離れてゐるのを見てとつたので、彼は瞬く暇ベチカに煖炉から舞ひあがつて、二人の先りをして、カチカチに凍てた積雪を四方八方へ掻き立て始めた。すると忽ち吹雪が捲き起つて、空中は真白になつた。雪は前後に網を引いたやうに飛びかひ、歩行者の眼といはず、口といはず、耳といはず、容赦なく貼り塞いでしまふほどであつた。そこで悪魔は、かうしておけば、チューブが教父クームといつしよに後へ引つかへして、てつきり鍛冶屋と鉢合せをして、彼をこつぴどい目に合はせるだらう、さうすれば、さすがのワクーラも当分は絵筆をとつて、忌々しい戯画ざれゑなど描くことは出来なくなるに違ひない、さう思ひこんで、再びもとの煙突をさして引つかへした。

*

*

*

事実、チューブは吹雪が捲きおこつて、風が正面まともから吹きつけ始めると、はやくも後悔の色を浮かべて、帽子の鏝をぐつとまぶかに引きさげながら、ぶつぶつと自身や、悪魔や、教父に向つて小言を浴びせかけた。とはいへこの忿懣はうはべだけのものであつた。チューブには吹雪の起つたのが結句うれしかつたのだ。補祭の家まではまだ、二人がそれまでに辿つて来た道のりの八倍もあつた。歩行者たちは後ろへ方向むきをかへた。風が項うなじへ吹きつけるばかりで、渦巻く吹雪をとほしては何ひとつ見わけれることも出来なかつた。

「待ちなよ、教父とつあん？ どうも見当が違つてるやうだよ。」と、少し後へ遅れてチューブが言つた。「おいらにやあ家が一軒も見えねえ。ちえつ、なんちふ吹雪だ！ ちつと脇へそれで道を探してみても呉んなよ、俺らはその間にこつちをさぐつて見るべえからよ。こねえに吹雪の中をうろうろさせられるちふのも、てつきり悪魔の仕業に違えねえだよ！ 道が目つかつたら忘れずに呼んで呉んろ。ちえつ、悪魔めが、なんちふ雪塊ゆきを吹きつけて、目潰しを喰らはしやあがるこつた！」

だが、道は分らなかつた。脇へそれた教父は、深い長靴ばきの足で前へ行つたり後へ戻つたりしてゐたが、最後にひよつこりと酒場の前へ出た。酒場を見つけてすつかり有頂天になつた彼は何もかも忘れてしまつて、からだにこびりついた雪を払ひ落しながら、往来

に残した仲間のことなどは、てんで心にもとめず、表口から中へ入つて行つた。一方、チユーブには道が分つたやうに思はれたので、立ちどまつて声を限りに呼び立ててみたが、教父がさつぱり姿を見せないの、自分だけひとりで帰ることにした。少し先きへ進むと、彼の眼には自分の家が見えだした。家のぐるりにも屋根の上にも雪が堆^{うづた}かく積つてゐた。彼は寒さに凍えた手をあげて、トントンと戸を叩きながら、娘に向つて戸を開けろといかつく呶鳴つた。

「此処にいつたい何の用があるんだ？」と、そこへ出て来た鍛冶屋が、威猛だかに呶鳴りかへした。

チユーブは、鍛冶屋の声を耳にして、少し後へさがつた。おやおや、これあおれの家ぢやなかつたわい。と、彼は口の中でつぶやいた。鍛冶屋めがおれの家へ立ち寄る訳はないからな。待てよ、よく見れば鍛冶屋の家でもないわい。いつたい、これあ誰の家だらう？　なあるほど！　さつぱり見当がつかねえと思つたら、なあんだ！　これあ、あの、近ごろ新嫁を貰つたばかりの、跛^{びつこ}のレヴチェンコの家ぢやねえか。おれのうちに似た家は奴さんの家より他にやあねえ筈だ。なるほど、さういへば、かう早く家へ帰りついたので、最初^{はな}から少し変だと思つたわい。それはさうと、レヴチェンコは今ごろ、補祭の家へ行つ

とる時分ぢやて、それはちやんとおれが知つてをる。それに、なんだつて鍛冶屋めが？…
…てへつ、へつ、へつ！ 彼奴あ若い新嫁のところへ、こつそり忍んで来てやがるのぢや
な。なあるほど！ ようし！…もうおれには、すっかり何もかも読めたぞ。

「いつたい何奴だ、それに何だつて戸口になんぞうろついてやがるんだ？」と、鍛冶屋は
前より一段と荒々しく呶鳴りながら、少し間近く詰めよつた。

いや、おれが誰だか名乗らぬことにしよう。と、チューブは考へた。この忌々しい
出来そこなひ野郎に擲られるくらゐがおちぢやから！ そこで彼は作り声をして、「わし
だよ、お前さん！ お慰みに一つ、こちらの窓下で流しをやらせて貰はうと思つたんでさ
。」と答へた。

「その流しと一緒にとつとと悪魔のとこへでも出て失せやがれ！」と、腹立たしげにワク
ーラが喚いた。「何を手前はいつまでも突つ立つてやがるんだ？ 聞えたらうが！ とつ
とと出て失せろつちふに！」

チューブの方でもとうに立ち去るのが賢明だとは考へてみたが、どうも、この鍛冶屋の
指図に否応なしに従ふといふことが業腹でならなかつた。彼はまるで悪魔に小突かれでも
したやうに、何かひとこと逆らつて見ないでは済まされなかつた。

「何だつてお前さん、さうがみがみ言ひなさるだね？」と、彼は前と同じ作り声で言つた。「おらはハア、一つ流させて貰ふべえと思つただけのこんでねえか！」

「ふん！ それぢやあ、口で言つただけぢやあ、分らねえつてんだな！」

さういふ言葉に次いで、チューブは肩先きに手酷い打撃を感じた。

「それぢやあ何だね、腕づくでかかつて来なさるだね！」彼は少し後へさがつて、さう言つた。

「出て失せやがれ、とつとと出て失せやがれといふのに！」かう喚きながら、鍛冶屋は又もやチューブをどやしつけた。

「何をしなさるだ！」と、チューブは痛みと怨みと怖気を含んだ声で叫んだ。「お前さん、本気でぶつたね、さつきよりひどくぶつたね！」

「出て失せろ、出て失せろ！」さう呶鳴りながら、鍛冶屋は戸をびつたりと閉めきつてしまつた。

見ろ、何ちふ威張り方だ！ と、往来に一人とり残されたチューブがつぶやいた。こんど傍へでも寄つて見ろ！ 飛んでもねえ！ 太い野郎めが！ 手前を裁判へ突き出すことの出来ねえおいらだとも思つてやがるのか？ いんにや、おれは訴へてやる、直かに

警察部長のとこへ告訴してやるぞ。今に思ひ知るがええ！ 手前が鍛冶屋だらうと塗職ぬりやだらうと、かまふこつちやねえ。それはさうと、背中と肩を見たら、きつと青痣が出来ることだらう。畜生め、恐ろしくひどく打ちやあがつて。だが、この寒空ぢやあ、裘ゴジューフ衣を脱ぐ訳にもゆくまいて。待つてろよ、畜生鍛冶屋め、悪魔が貴様と貴様の鍛冶場をぶちこはしてしまへばええ。今に思ひ知らせてやるぞ！ くそつ、忌々しい首くり野郎めが！ だが、ちやうど今、奴あ家にゐないんだな。さうするとソロハが独りでぼんやりしてをる筈ぢやて、ふん！……ここからは道も遠くなし——行つてやるかな！ こんな時刻だから誰に見つかる心配もなし、ひよつとすれあ、嬉しい首尾にならねえにも限らんで……。ほんに、あの忌々しいど鍛冶屋め、おつそろしく酷く打ちやあがつて！

そこでチューブは、背中をさすりさすり、別の方角へと歩きだした。眼の前に自分を待つてゐるソロハとのあひびきの楽しさに、いくら痛みも忘れて、吹雪の唸りにも負けず往来ぢゆうにピシピシ音をたててゐる酷い凍いてをさへ身に感じなかつた。口髭といはず顎鬚といはず、お客の鼻を容赦なくつまみあげて石鹼を塗りたくるどんな理髪師よりも素早く、吹雪のために真白にされてしまった彼の顔には、ともすれば、くすぐつたいやうな表情が浮かんだ。だが、卍巴と降りしきる吹雪が視界を遮ぎつてしまったため、なほも長

い間、ときどき立ちどまつては背中を撫で撫で、『忌々しい鍛冶屋めが、こつぴどく打ちやあがつて！』と、ブツブツ呟やきながら道を辿るチューブの姿は、もはや見るべきで
きなかつた。

*

*

*

さて、あの長い尻尾と山羊鬣をもつたくだんの敏捷な洒落者が、いつたん煙突から飛び出して行つて、再び煙突へ戻つて来た時、彼が盗んだ月を入れて帯皮の脇に釣つてゐた胴籠が、どうかしたはずみで煖炉ペチカの内側にひつかかつて口をあいた。そのすきに月は得たりとばかりに、ソローハの家の煙突を通りぬけて、するすると空へ舞ひあがつた。下界は一時にぱつと明るくなつて、吹雪などはまるで無かつたもののやうに、あたりは鎮まりかへり、雪は広々とした銀の野と輝やき、さながら一面に水晶の屋でも撒いたやうに見えた。寒気も幾らか緩んだやうにさへ思はれた。若者や娘たちの群れが、袋を担いで現はれた。歌声が響き出して、流しの群れの集たからぬ家は稀れであつた。

麗らかに月が輝やいてゐる！ こんな夜、キャツキャツと笑つたり歌をうたつたりする

娘たちや、賑やかに笑ひさざめく夜にだけしか思ひつくことのできない諧譚じょうだんや駄洒落を、やたらに連発する若い衆たちの間へ割りこんで揉まれる面白さは、ちよつと口では説明が難かしいくらゐだ。ぴつたりからだ軀をくるんだ裘衣コジューフはあつたかく、寒気のために頬の色もひときは生き生きと冴えて、悪巫山戯に至つては、まるで後ろから悪魔に尻押でもされてゐるやうだ。

袋を手につつた娘たちの群れはチューブの家へ押しかけて、オクサーナをとりまいた。わめき声や高笑ひやおしやべりで、鍛冶屋の耳は聾つんぼになつてしまひさうだつた。一同はわれ勝ちに何か彼かオクサーナに珍談を語つて聞かせたり、背中の袋をおろして、もうかなり流して貰ひ集めた白麵麩や腸詰や団子などの品さだめをしたりした。オクサーナはすっかり上機嫌で、にこにこしながら、誰彼なしに相手には無駄口を叩いて、ひつきりなく笑ひころげた。

一種の忌々しさと妬ましさを覚えながら、鍛冶屋はさうしたはしやぎを眺めてゐた。そして自分も大好きな流しが、この時ばかりは呪はしいものに思はれた。

「あら、オダールカさん！」と、陽気な美女が娘たちの中の一人に向つて叫んだ。「あんな、新らしい靴を穿いてるわね。まあ、なんて素晴らしい靴でせう！ 金糸きんの刺繡ぬひがして

あつてさ。あたしなんかには、誰あれもこんな素敵な靴なんて買つて呉れやしないわ。」

「悲観することはないよ、おれのだいじなオクサーナ！」と、鍛冶屋が口を出した。「おれがお前に高貴な令嬢方も滅多にはいてゐないやうな靴を手に入れてやるから。」

「あんたが？」さう、横柄にチラと彼を眺めて、オクサーナが言つた。「あんたが、あたしの足にはけるやうな靴を何処で手に入れるか、ひとつ見てゐてあげるわ。ふん、あんたが女帝のおはきになる靴でも持つて来てくれたらねえ。」

「まあ、ずるぶん注文が大きいのね！」と、娘たちの群れが笑ひながら叫んだ。

「ええ、さうよ！」と美女は誇りに語を継いだ。「ね、皆さん、証人になつて頂戴な。

もし鍛冶屋のワクーラさんが女帝のおはきになる靴を持つて来て呉れたら、あたし屹度、その場でこの人のお嫁になることよ。」

娘たちは、このやんちやな美女を伴つて出かけて行つてしまった。

笑へ！ 笑へ！ と、一同の後から外へ出ながら鍛冶屋はつぶやいた。おれは自分で自分を笑つてるんだ！ 考へれば考へるほど、おれの頭はまつたくどうかしてゐる。あいづはおれを好いてゐないんだが——ままよ、勝手にしやがれだ！ 女といへばまるで世界ぢゆうにオクサーナよりほかにはないとでもいふのかい。あの女でなくつたつて、お蔭さ

まなことに、村にやあ好い娘が、ざらにあらあな。オクサーナがなんだい？ あんな女は主婦かみさんにやあむかないさ。あいつはおめかしの名人といふだけのことぢやないか。ううん、もう沢山だ！ もういいかげん、馬鹿な真似はよさう。

しかし、鍛冶屋がかうきれいさつぱり諦らめようとしたその刹那、ある意地の悪い精霊すだまが、女帝の靴を持つといで、さうしたらお嫁にいつてあげるよ！ とからかふやうに言ひながら笑つてゐるオクサーナの面影をまざまざと彼の眼前へ浮かびあがらせた。すると遽かに彼の魂は騒ぎ立つて、オクサーナのことよりほかには何ひとつ考へられなくなつてしまつた。

流しの群れは、若い衆は若い衆、娘つこは娘つこと、てんでに往来から往来へと先きを急いだ。しかし鍛冶屋は歩きながらも何ひとつ眼にもとまらず、前には誰よりも好きだつたこのお祭り騒ぎに仲間入りする気にもなれなかつた。

*

*

*

話かはつて、その間に、悪魔はソローハの傍らですつかり現つを抜かしてゐた。彼はち

やうど陪審官が補祭の娘に向つてするやうな鹿爪らしい顔で女の手に接吻して、自分の胸に手を当てるホツと吐息をつきながら、もしも彼女がうんと言つて自分の欲望を叶へ、然るべく犒ねぎらつて呉れない暁には、何をしでかすか分つたものぢやない。恐らく水中へ身投げをして、魂だけは焦熱地獄へまつさかさまに落ちて行くだらうなどと、ぬけぬけと切りだしたものだ。ところでソローハはさほど情つれない女でもなかつたし、第一、悪魔と彼女が共謀ぐもになつてゐたことも明らかだ。それに、もともと彼女は、自分の尻を追ひまはず連中をあやなすのが大好きで、さういふ手合を引き入れてゐないことは稀らしかつた。しかし今夜だけはこの村の主だつた連中はみな補祭の家の蜜飯クチャに招かれてゐるから、どうせ誰ひとり忍んで来るものはあるまいと思つてゐた。ところがまんまと予想がはづれて、悪魔がやつと想ひのたけを打ち明けたばかりのところ、だしぬけに表の戸を叩く音がして、それといつしよに、がつちりした村長の声が聞えたのだ。ソローハは急いで戸をあけに駈けだした。咄嗟に、敏捷な悪魔はそこにあつた袋の中へ潜もぐりこんだ。

村長は帽子についた雪を払ひ落すと、ソローハの手づから火酒ウオツカを一杯のみほして、さで、吹雪になつたので補祭のところへ行くのは見あはせたが、彼女の家の灯りを見ると、急に今夜は一つこちらで暇つぶしをしようと思ひたつて、やつて来たのだと告げた。

村長がかう言ひきるかきらないのに、また戸を叩く音といつしよに補祭の声が戸口で聞えた。

「わしをどつかへ隠かくまつて呉れ。」と、村長が小声で言つた。「今ここで補祭と顔を合はせちやあ、ちと具合が悪いから。」

ソローハは、こんな大兵なお客をいつたい何処へ隠したものと、暫らく思案に迷つたが、最後に一番大きい炭袋を選んで、中の炭を桶へぶちまけた。すると、髭を生やした堂々たる村長が頭に帽子をかぶつたまま、その袋の中へ這ひずりこんだ。

補祭はハアハアいつて、手をこすりこすり入り入つて来ると、招よんだお客が一人もやつて来ないので、もつけの幸ひだと思つてちよつくら遊びに来たが、吹雪なんぞは屁でもなかつたと言つた。そしていきなり女の傍そばへすり寄つて、オホンと咳払ひをしてニヤリと笑つた。それから長い指で女のむつちりした剥きだしの腕にちよいと触つて、狡ず獪るさうな、それと同時にひどく得意らしい顔つきをして、「これはいつたい何でしたつけね、美しいソローハさん？」さう言つて、少し後へ飛びのいたものである。

「何だもないぢやありませんか？ 腕かひなでござんすよ、オーシップ・ニキーフオロキツチ！」とソローハが答へた。

「ふうむ！ 腕かな！ ヘッヘッヘッ！」補祭はさう言つて、自分の口切りに心から満足して部屋をひとまはりした。

「ぢやあ、これは何ですかね、わしのだいじなだいじなソローハさん？」同じやうな顔つきで再び女に近よると、ちよいと女のうなじに手を掛けて、さう言つてから、同じやうに後ろへ飛びさがつた。

「御存じの癖に、オーシツプ・ニキーフオロキツチ！」と、ソローハが答へた。「うなじでございますよ、うなじに掛かつてゐるのは頸飾でございます。」

「ふうむ！ うなじに頸飾かな！ ヘッヘッヘッ！」そして補祭は再び手を揉みながら部屋をひとめぐりした。

「して、これは何ですか、較くらべものもないくらゐ美しいソローハさん？……」ここで、この好色な補祭がその長い指でいつたい何処に触らうとしたのか、それははつきりしないが、ちやうどその時、だしぬけに戸口にノックの音がして、哥薩克のチューブの音が聞えた。

「えつ、南無三、邪魔がはいりをつたわい！」と、補祭はびつくりして叫んだ。「わしの役柄で、こんなところを見つかつて堪るものか？……もしコンドウラト神父の耳へでも

入つたことなら……。」

だが、補祭の恐れはそれではなくて、何より自分の女房にばれはせぬかと懸念したので。彼の女房といへば、それでなくてさへ恐ろしい腕力を振つて、たつぷりあつた彼の長髪かみを引きむしつてほんの僅かにしてしまつた女なのだ。「親切なソローハさん！ 後生だよ。」と、全身をわなわな震はせながら補祭は訴へるのだつた。「あんたの善根は、ちやうど、ルカ伝にも言つてある、第十三章……十三……叩いてみますよ、ほんとに叩いてをる！ ああ、わしをどこかへ隠かくまつて下されい。」

ソローハはもう一つ別の袋の炭を手桶へぶちまけた、と、さして大柄でもない補祭がその中へ這ひ込むなり、チョコナンとその底に坐つたので、まだ上から炭の半俵やそこいらは入れることが出来るくらゐだつた。

「今晚は、ソローハ！」と、家の中へ入りざまチューブが声をかけた。「おほかたお前さんはわしが来ようなどとは思はなかつたらうが？ ほんとに思ひがけなかつたぢやらう？ ひよつとわしが来て邪魔ではなかつたかな？……」チューブはかう言ひながら、その顔に浮々した仔細らしい表情をうかべたが、それは予め彼が鈍重な頭をしぼつて、何かぴりつとした、とつときの冗談を飛ばさうものと工夫をこらしてゐることを物語つてゐた。

「多分お前さんは、今ここで誰かといちやついてゐたんぢやらう！……おほかた、もうお前さんは、誰かを隠かくまつてゐるのだらうが、ええ？」かうした咎め立てをしてすつかり有頂天になりながら、チューブはソローハから懇ろにされるのはひとり自分だけだと、内心すこぶる得意らしく、ニヤリと笑つた。「ぢやあ、ソローハ、火酒ウオツカを一杯御馳走にならうかな。忌々しい凍いてでな、この咽喉のどがごこえてしまつたやうな気がするて。どうもはや、降誕祭の前夜がこんな晩と来ちやあ！あの酷い吹雪といつたら、なあソローハ、まつたくどうも、恐ろしい吹雪ぢやつたよ……。ちえつ、手が硬ばつてしまつたわい。裘衣コジユーフ

のボタンもはづせやせん！ ああ恐ろしい吹雪ぢやつた……。」

「あけて呉れ！」さういふ声が戸外そとから聞えて、戸をドンドン叩く音がしだした。

「誰か戸を叩いとる。」と、立つたままチューブがつぶやいた。

「あけて呉れ！」今度は前より一段と声が高くなつた。

「あれあ鍛冶屋だよ！」と、チューブは帽子を掴みながら言つた。「なあ、ソローハ、何処でもよいからおれを隠して呉れ。おれはこの世で何が厭だといつて、あの忌々しい出来損ひ野郎に姿を見せるくらゐたまらんことはないのぢや！ あん畜生の眼の下に山のやうな水腫れでも出来るといいのぢやが！」

ソローハは、自分でも仰天してしまつて、まるで狂^{きちがひ}人のやうに周章^{あわて}ふためいた挙句、うつかりチューブに、補祭の入つてゐる袋を指さして、その中へ潜り込めと相図をした。哀れな補祭は、殆んど自分の頭の真上から重たい大男にしやがみこまれて、こちこちに凍てついた長靴で顛^{こめかみ}顛^{こめかみ}を挟まれながらも、苦しいからとて咳払いはおろか、呻き声一つもらすことさへ出来ない始末であつた。

鍛冶屋は家へ入つても一切口もきかなければ、帽子も脱がずに、腰掛の上へ倒れるやうに身を投げた。明らかに彼はひどく機嫌を損じてゐた。

ソローハが息子の入つて来た戸口を閉めたばかりのところ、またしても誰か戸を叩く者があつた。それは哥薩克のスウエルブイグーズだつた。最早この男まで袋の中へ隠す訳にはゆかなかつた。といふのは、とてもそんな大きな袋を見つけることは出来なかつたからである。その男は村長よりも肥満^{ふと}つてゐて、身の丈はチューブの教父^{クーム}よりもつぽだつた。そこでソローハは彼を野菜畠へ連れこんで、そこで彼の言ひ分を聞くことにした。

鍛冶屋は放心したやうに、遠く村の端々まで拡がった流しの唄を時々耳に止めながら、自分の家の隅をきよろきよろ身廻してゐたが、最後にくだんの袋に眼をとめた。何だつてこんなところに袋があるんだらう？ とつくに片づけておかなきやならん筈だのに。あ

のたはけた恋でおれの頭はからきし阿呆になつてゐたんだよ。あすは祭りだといふのに、
 まだ家んなかにこんなものを引つ散らしておいてさ。せめて鍛冶場しごとばへでも運んでおかう！
 そこで鍛冶屋はそのとてつもなく大きな袋の傍へしやがみこんで、それをしつかりひつ
 括つて肩へ担ぎあげる仕度をした。だが明らかに彼の心はあらぬ方を彷徨さまよつてゐたに違ひ
 ない。さもなければ、袋を締める時に縄の下へ髪の毛を括り込まれたチューブが悲鳴をあ
 げたのと、肥満漢ふとつちよの村長がかなりはつきり逆しやつくり吃くをしたのを、耳にしない筈がなかつ
 た。あの碌でもないオクサーナのことなんか、もうすつかり頭の中から叩き出してしま
 った筈ぢやないか？ と鍛冶屋は呟ささやいた。あいつのことなんか忘れてしまつた方がい
 いのに、後から後から、わざとのやうにあいつのことばかり思ひ出されてしやうがない。
 なんだつてかうなんだらう、心で思ふまいとすることが頭の中へ潜りこむつてえのは？
 うつ、畜生！ この袋め、何だか前よりよつぽど重たくなりをつたぞ！ きつと炭の他に
 何か入つてゐるに違ひない。いや、なんといふおれは馬鹿だ！ 今のおれには何に依らず、
 前よりも重く思へるつてことを忘れてゐるなんて。前には、おれは片方の手で五哥銅貨カペイカや
 馬の蹄鉄くつがねを折り曲げたり伸ばしたりすることだつて出来たのに、今ぢやあ炭の袋さへ担
 げないのだ。今に風に吹き倒されるやうなことにだつてなるかもしれん……。なんの！

茲でちよつと口を噤むと、うんと一つ氣張つて彼は叫んだ。おれは女あまつ子ぢやねえぞ！

他人ひとの物笑ひになんぞなるものか！こんな袋とうの十をだつて担いでやらあ。そして、頑丈な男が二人がかりでも運びきれさうにない袋を、二つとも健氣に肩へ担ぎあげた。

こいつもついでだ。さう言つて彼は、悪魔が底に丸くなつてしやがんでゐた、小さい袋も一緒に持ちあげて、この中には、おれの樂器がへえつてゐた筈だて。さう言つて家を出ると、彼は口笛で歌を唄ひながら歩き出した。

女房の機嫌は、

おいらにやとれぬ。

*

*

*

往還は唄や笑ひや喚き声でますます騒がしくなつた。揉みあふ人の群れは、隣り村からやつて来た連中が加はつていよいよ多勢になつた。若い衆連は矢鱈に巫山戯て狂ひまはつた。時々、流しの合間々々に、誰か若い哥薩克が即興で作つた陽気な唄が聞えた。と、不意に群集の中の一人が讚カリヤードカ仰歌の代りに、吼えるやうな声を振り絞つて おほまか を歌

ひ出した。

おほまか、こまか！

団子をおくれ！

お粥もたつぷり

腸詰ひとつ！

どつと笑ひ声はその剽軽者に酬いた。すると小窓の戸があいて、老婆（さういふ婆さんだけが生真面目な爺さんと一緒に我が家に残つてゐたのだ）が、痩せた手に腸詰だのピロオグの一片ひとかけだのを掴んで差し出した。若者や娘たちは我れ勝ちに袋を突き出して獲物を奪ひ合つた。或るところでは若者たちが八方から寄つて来て、娘つこの群れをとりかこんだ。騒々しいわめき声がどつとあがり、一人が雪を丸めて投げつけると、一人はいろんな物の入つた袋を引つたくる騒ぎ。又ある場所では娘たちが若者の一人を捕まへて足がらみを喰はせる。と、若者は袋をかついだまま、まつさかさまに地べたにのめつた。みんなは夜つびて浮かれまはる覚悟であるらしい。それに今夜はお詔らへ向きの素晴らしい星空と

来てゐる！　そして月の光りは雪の反射で一段と明るく思はれる。

鍛冶屋は袋を担いだまま立ちどまつた。彼の耳にふと、娘たちの群れにまじつたオクサーナの声と、彼女のか細い笑ひ声が聞えた。彼の身内は一時にぶるつとふるへた。彼は大きい方の二つの袋を地べたへ抛り出して——それ故、その中に入つてゐた補祭は打傷うちみのために悲鳴をあげ、村長は思ひきり逆吃をした——小さい方の袋を担いだまま、今オクサーナの声をしたやうに思はれる娘つ子の群れの後を追ふ若者たちに加はつて歩き出した。

そら、あれが彼女あいつだ！　まるで女王みたいに振舞つて、黒い眼を光らせてやあがる。彼女あいつに様子の好い若造が何か話をしてやあがるぞ。あいつが笑つてるところを見ると何か可笑しい戯ざれぐち口を叩いてやがるのに違ひない。だが彼女あいつはしよつちゆう笑つてゐる女だて。そして、自分でも何が何やらさつぱり分らずに、いつか群集の中をすり抜けた鍛冶屋は、オクサーナのそばまで行つて立ちどまつた。

「あら、ワクーラさん、あんた此処にゐたの！　まあ今晚は！」かう美女は、ワクーラの頭をぼうつとさせてしまふやうな、いつもの微笑を湛へながら言つた。「どう、たとと流しで貰へて？　おやおや、なんて小つぽけな袋だこと！　あの、女おきさき帝様の靴は手に入つ

て？ 早くそれを手に入れなさいよ、あたしお嫁に行つてあげるからさ……。」「さう言つて、キャツキャツ笑ひ出すなり、娘たちの群れといつしよに駈け去つてしまった。

鍛冶屋はまるで根でも生えたやうにその場に棒立ちになつてゐた。 いや、もういけねえ。 もうこれ以上、おれには我慢が出来ん……。 やがて彼はさう呟やいた。 だが、ほんとに、どうして彼女あいつはあんなに凄く美しいのだらう？ あいつの眼つきといひ、声といひ、何もかもが、まるで灼きつくやうだ、灼きつく……。 いけねえ、おれはもう自分で自分をどうすることも出来ない。 いよいよ何もかもに結着けりをつける時だ。 靈魂たましひも消えて亡くなれ！ おれは氷の穴から身投げをしておつ死ちんでしまはう！

そして決然たる歩調あしどりで娘たちの群れに追ひつくと、彼はオクサーナと肩をならべて、きつぱりした口調で言つた。「左様なら、オクサーナ！ 誰でもすすきな花簪を見つけるがいいよ、そしてすすきな男をからかふがいいさ。しかし、もうおれはこの世ではお目にかからねえよ。」

美女はびつくりしたらしく、何か言はうとしたが、鍛冶屋は手を一つ振るなり、駈け出してしまった。

「おうい、何処へ行くんだい、ワクーラ？」若者たちは駈けてゆく鍛冶屋の後ろから呼ん

だ。

「左様なら、みんな！」と、鍛冶屋はそれに答へて叫んだ。「神の思召しで、又あの世ではお目にかかるかも知れねえが、もうこの世ではいつしよに遊べないよ。左様なら！ これまでのことは悪く思はないで呉れ！ コンドウラト神父にさう言つて、おれの罪障の深い魂の追善をして貰つて呉れないか。それからおれはつい俗事にかまけて上帝や聖母の御像へ上げる蠟燭の彩色いろつけをたうとうしおほせなかつたつて、断わつてくれ。そしておれの長持の中にある物はみんなお寺へ寄進するつてこともな。ぢや、左様なら！」

これだけ言ひきると、鍛冶屋は袋をしよつたまま、どどん駈け出して行つてしまった。「ありやあ、どうかしてるぞ！」と若者たちは言つた。

「死神がついとるだあよ！」と、傍らをとほりかかつた老婆が、さも信心深さうにつぶやいた。「今に、鍛冶屋が首を縊つたつちうて評判になるだんべえ！」

その間にワクーラは、いくつかの街路とほりを走り抜けたが、ちよつと一と息いれようとして立ちどまつた。おれはいつたい何処へかう急いでるのだらう？ と、彼は考へた。まるで何もかもすつかり駄目になつてしまつたかなんそのやうに。いや、もう一ぺん手段を尽してみよう。さうだ、あのザポロージエ人のプザートウイ・パツユークのところへ行つ

て見るんだ。何でも人の話では、あの男は悪魔といふ悪魔とはみんな知り合ひで、かうと思つたことはすべて自分の望みどほりになるつてことだ。行かう、どうせ、おれのたましひ靈魂はどつちみち亡びてしまふんだから！

それを聞くと、長いあひだ身動きもせずにくんでゐた悪魔は、嬉しさのあまり袋の中でこをどりをした。しかし鍛冶屋は、どうかしたはずみに自分の手が袋にひつかかつてひとりでに動いたのだと思つて、頑丈な拳で袋を叩きつけてから、肩の上で一つゆすぶると、プザートウイ・パツユークの住ひをさして歩き出した。

このプザートウイ・パツユークといふ男は、かつてザポロージエにゐたといふことは確かだが、そこから追放されたのか、それとも勝手に出て来たのか、その辺のことは誰も知らなかつた。彼はもうずっと以前から、さうだ、十年か十五年も前から、デイカーニカに住んでゐた。最初はなから彼は正真正銘のザポロージエ人らしい生活くらしを送つてゐた。つまり、何ひとつ仕事をするでもなく、一日の四分の三は寝て暮し、食物は草刈人足の六人前も平らげ、酒は一度にたつぷり五升樽の一樽くらゐはペロリと呑み乾した。尤もパツユークは背丈が短かかつた代りに、横へ随分ふとつてゐたから、それだけの物を摺りこむ余裕は十分にあつたわけだ。それから彼のシヤロワールイはいてゐる寛袴だが、その太いことといつたら、

彼がどんな大股に歩いてても足はまるで見え、さかをけ酒蒸桶ブザートウイが往来をよたよた蠢めいてゐるといつた恰好だつた。恐らく、こんなことから彼を太鼓腹と呼び始めたものだらう。この男が村へ来てまだ幾週間もたたないうちに、村民は彼が魔法使であることを知つた。そこで誰か病気をするやうなことがあると、さつそくパツユークが呼び迎へられた。ところがパツユークがほんの二言三言、呪文を唱へただけで、病気は立ちどころに、拭ひ取つたやうに、けろりと癒つてしまふのだつた。すきつ腹ぼらの貴族があわてて魚の骨を咽喉に立てたりしたやうな場合には、パツユークが実に巧みに拳で背中を叩いて、その貴族の咽喉には何の故障も残さずに骨をば行くべき処へすうと通してしまつた。最近は何をあれをあれと見かけることが稀れになつた。それは多分、ものぐさからでもあつたらうが、或はまた、我が家の戸口を擦り抜けるのが年とともに困難になつて来たからでもあらう。この頃では、何か彼に用のある時は、村人の方から彼の家へ出かけて行かなければならなかつた。

鍛冶屋が内心おどおどしながら、戸を開あけて見ると、パツユークは、ガルーシユキ団子汁をいれた鉢を桶の上にのせて、それに向つて土耳其風にあぐらをかいて坐つてゐた。その鉢はちやうどお詔へ向きに彼の口と同じ高さに据わつてゐた。指一本動かすでもなく、彼は少し首を鉢の方へかشيげて汗しるを擦りながら、時々団子を前歯で捕へては食つてゐた。

いや、こ奴はと、ワクーラは肚の中で思つた。チューブ以上のものぐさ野郎だぞ、あの親爺はまだしも匙を使つて食ふが、この男と来ては手を持ちあげることさへ吝んでやがる！

パツユークはよほど、ガルーシユキ団子汁に夢中になつてゐたものと見えて、鍛冶屋が鬨をまたぐなり、平身低頭して挨拶をしたのに、彼はまるで鍛冶屋の来たことも気がつかぬそぶりだつた。

「ちよいとお願ひの筋があつて来たのですがね、パツユークさん！」と、もう一度お辞儀をしながらワクーラが言つた。

ふとつちよのパツユークは、ちよつと頭をあげただけで、またガルーシユキ団子汁を啜りにかかつた。

「さう言つちやあ、何ですが、世間の噂では、その、あんたは……」と、勇を鼓して鍛冶屋はつづけた。「こんなことを言ふのは、決してあんたに無礼を加へようためではありませんが——あんたは、ちつとばかり悪魔に御縁がおりださうで……。」

かう言つておいて、ワクーラは、それでもまだ、自分の言ひ方が不躰けで、こんなひどい言葉をあげすけに言ひきつてしまつたからには、パツユークが鉢ぐるみ桶をさしあげて、

彼の頭をめぐけて投げつけはせぬかと、少し後ろへさがつて、ガルーシユキ 団子汁の熱い汁を顔に浴びせられないやうに、袖で顔をおほつた。

だが、パツユークはジロリとこちらを眺めただけで、再びガルーシユキ 団子汁を啜りはじめた。

すこし勇氣を取りなほした鍛冶屋は、思ひきつて言葉をつづけた。「私はあんたを頼つて来たのです、パツユークさん。どうか神様があんたによろ万づの物を、あらゆる不足のない福德を、割前だけの麵麩を、お授けになりますやうに！」（この鍛冶屋は時たまはやりことば流行語をちよいと挿はむことがあつた。それはポルタワのソートニツク百人長のところへ、板塀を塗りに行つた時以来、覚えこんだ癖であつた。）この罪深い私は今、滅亡しかかつてゐるのです！

この世ではもう私の救はれる道がないのです！ もう、どうなつても構ひません。私は悪魔の助けを借りに来たのです。ねえ、パツユークさん！」と、鍛冶屋は、やはり黙りこくつてゐる相手を見やりながら、言つた。「私はいつたいどうしたら好いのでせうか？」

「悪魔に用があるのなら、悪魔のところへ行くがよい！」と、パツユークは相手の顔も見ガルーシユキずに 団子汁を貪りつづけながら、答へた。

「それだからこそお邪魔に上つたのです。」とお辞儀をして、鍛冶屋は言葉を返した。

「あんたを措いて、悪魔のところへ行く道を知つてゐる者は、この世にはないと思ひます

んで。」

パツユークはやはり無言のまま、残りのガルーシユキ団子汁を食ひつづけてゐた。

「どうぞ後生ですから、枉げてこの願ひを聴き入れて下さい！」と、鍛冶屋は縋るやうに言つた。「豚肉でも、腸詰でも、蕎麦粉でも、それとも、布地にしろ、稷にしろ、そのほかどんな物でも、おいりやうの節には……それあもう大概どなたの処でもよくあり勝ることなんで……さういふ折には、決して物吝みはいたしません。いつたいどうしたら、悪魔と近づきになれるか、ひと通り話して頂けませんでせうか。」

「悪魔を肩にかついでゐながら、わざわざとほみち遠路を行くにも当るまいて。」さう、依然として身の構へを変へようともしないで、パツユークが答へた。

ワクーラは、その言葉の意味がそこに書いてでもあるやうに、まじまじと相手の顔を見つめた。この人の言ふのは、いつたいどういふことなんだらう？ 彼の顔には、さういふ無言の疑惑が現はれて、その口は、第一番に発せられる相手の言葉を、団子かなんどのやうに、呑みこまうとでもするやうに、ぽかんと半びらきになつてゐた。

しかしパツユークは黙りこくつてゐた。

その時ワクーラは、パツユークの前にはもう、ガルーシユキ団子汁も桶も無くなつて、そのかはり

に、床に二つの木鉢が並んでゐるのに気がついた。その一つには肉入団子が盛られて、もう一つの方には凝乳が湛へてあつた。彼の眼と心とは期せずしてその食物の上に集中された。見てゐてやらうと、彼は肚の中でつぶやいた。いつたい、どうしてパツユークは肉入団子を食ふだらう？ 今度はまさか団子汁のやうに、俯向いて啜るのではあるまい。それは出来ない相談で、肉入団子には先づ凝乳をまぶさなきやならんからなあ。

彼がこんなことを考へてゐる間に、パツユークは口をあいて肉入団子をちよつと覗むと、一層大きく口を開けた。すると、肉入団子の一つが鉢から跳ね上つて凝乳の中へ飛び込んだが、そこで一度でんぐり返りをしてから、ぴよんと上へ飛びあがるなり、まつすぐにパツユークの口の中へ飛びこんだ。それをむしやむしや食つてしまふと、彼はまた口を開けた。すると肉入団子は前と同じ順序で、彼の口へ飛びこんで来た。だから彼自身は、ただもぐもぐと嚼んで嚙みこむだけの手間しか要らなかつた。

なんちふ不思議なこつたらう！ さう思ひながら、鍛冶屋は呆氣に取られて、ぼんやり口を開けた。と同時に、彼の口へも肉入団子が一つ飛んで来て、ハツと思ふ間に口端ぢゆうを凝乳だらけにした。鍛冶屋は肉入団子を払ひ落して口を押し拭ひながら、世にも

不思議なことがあるものだ、悪霊といふものは何処まで人間を伶俐にするのだらうと深く感歎して、それにつけても今自分に助力を与へ得る者は、パツユークを措いて他にはないと確く信じた。

もう一度頭を下げて、詳しく教へて呉れるやうに頼んでみようか……。それにしても、なんといふ罰あたりだらう！ 今夜は精進の蜜飯クチャだといふのに、このひとは肉入団子ワレーニキを、こんな腥い肉入団子なまぐさワレーニキを食つてゐる！ ほんとおれとしたことが、なんといふ馬鹿だらう、こんな処にゐるだけでも、罪障を重ねるといふものだ！ さうだ、もう帰らう！……そこで、信心深い鍛冶屋は、一目散にその家から逃げ出した。

しかし、袋の中で、前もつて有頂天になつてゐた悪魔には、こんな素晴らしい獲物が見す見す自分の手からすりぬけてゆくのを、手を拱いて眺めてゐることが出来なかつた。鍛冶屋が袋に掛けてゐた手をちよつと緩めた隙に、悪魔はすばやく外へ飛び出して、鍛冶屋の頸つ玉へびよいと馬乗りに跨がった。

鍛冶屋はぞつと寒けを覺えた。吃驚仰天して、真蒼になつた彼は、なすべき術すべも知らなかつた。そこで彼はすんでのことに十字を切らうとした……。すると悪魔が俯向いて、犬と同じやうな鼻面をワクーラの右の耳もとへ寄せて、私ですよ、あなたの親友ともだちですよ。

私は友達のためならばなんでもいたします！ お金が御入用ならお望みだけ差しあげます。

さう言つてから今度は左の耳もとでヒクヒクと鳴いた。それからまた、右の耳へ口を寄せて、オクサーナは今夜にもあなたのものになりますよ。と、囁やいた。そこで鍛冶屋は立ちどまつて考へ込んだ。

「よし。」と、やがて彼が言つた。「さういふ約束なら貴様のものになつて呉れよう！」悪魔は手を拍つて、喜びのあまり鍛冶屋の頸の上でこをどりした。今こそ鍛冶屋め、おれの手の中へ落ちやがつたぞ！ と、彼は心に思つた。今こそ、兄弟、手前がおいらに負はせをつたあの絵そらごとに対して復讐しかへしをしてやるのだ！ ほんとに、この村ぢゆうで一番の信心者が、たうとうおいらの手に落ちたと知つたら、仲間の奴らが何といふだらうな？

茲で悪魔は、尻尾のある同族どもに地獄で鼻をあかせてやつたり、彼等の仲間うちでも一番の策士として立てられてゐる跋びつの悪魔がぢだんだ踏むさまを想像しながら、ぞくぞくして北叟笑んだものだ。

「さて、ワクーラさん！」と、逃げ出されやしないかと懸念して、まだ頸から降りようともしないで、悪魔はヒクヒク声で囁やいた。「御承知の通り、何事にも契約書といふもの

「が要りますねえ。」

「覚悟の前だ！」と、鍛冶屋が答へた。「手前たちの仲間では、血判をするつていふぢやないか。待て待て、いま衣囊かぶしから釘を出すからな。」

さういつて彼は、こつそり片手をうしろへ廻すなり——むんずと悪魔の尻尾を掴んだ。

「これ、なんといいふ悪戯わるさをしなさるだ！」と、笑ひながら悪魔が叫んだ。「さあ、もう沢山です、ふざけるのはいい加減になさいよ！」

「待て待て、兄弟！」と、鍛冶屋が叫んだ。「そうら、これが手前には何に見える？」さう言ひながら彼は十字を切つた。すると悪魔は、まるで仔羊のやうにおとなしくなつた。

「待つてろよ。」と、その尻尾を持つて地面へ引きずりおろしながら、「さあ、このおれが、堅気な人間や正直な基督教徒を罪にひき入れをつた貴様に仕返しをしてやるぞ。」

さういふと、鍛冶屋は不意に悪魔の上へ飛びのつて、十字を切るために手をさしあげた。「どうか勘弁して下さい、ワクーラさん！」と、哀れつぽい声で呻くやうに悪魔が言つた。「どんなことでも、あなたの御用を勤めます。ただ懺悔をするために魂だけは放して下さい。その怖ろしい十字を私に向つて切らないで下さい！」

「へん、なんといいふ声で、この忌々しい独逸人めは吠えやあがるんだ！ 今こそおれは、

どうしたらいいかが分つたぞ。さあ、これから直ぐにおれを背中へ乗せてつれて行け！
分つたか？ 鳥のやうに飛んで行くんだ！」

「何処へ参りますので？」と、しよげ返つた悪魔がたづねた。

「彼得堡へだ、まつすぐに女帝陛下のところへ！」さういつた瞬間に、鍛冶屋は自分の
からだか空中へ舞ひ上つて行くのを感じたが、怖ろしさのあまり、ぼうつと気を失つてし
まつた。

*

*

*

暫らくの間オクサーナは、鍛冶屋の言ひおいて行つた変な言葉にとつおいつ心を悩まし
て、たたずんでゐた。彼女は心の中で、何とはなしに、余りに自分が彼につれない仕打ち
をしてゐたやうに思つた。もしや彼はほんとは何か怖ろしい覚悟をしたんぢやないかし
ら！ 分りやしないわ！ どんなことで、自棄から他の女を想ふやうになつて、面あてに
でもその女を村一番の美人だなんて言ひ出さないにも限らないわ！ でも、そんなことは
ないわ、彼はあたしを愛してゐるんだから。あたしはこんなに美しいんだもの！ 彼がどん

なものにだつて、このあたしを見返るなんてことはないわ。^{あのひと}彼は冗談にあんな真似をしてゐるだけなのよ。十分も経たないうちに、屹度あたしの顔を見に戻つて来るわ。あたしはどこまでも強情者よ。^{あのひと}彼にいやいや接吻させるやうに見せかけなくつちやいけないわ。さうするとよけい^{あのひと}彼は有頂天になるだらうから！ そしてこの気まぐれな美女は、もう自分の友達とふざけ散らしてゐた。

「みんなちよつとお待ちよ。」と、娘たちの一人が言った。「鍛冶屋のワクーラさんが袋を忘れて行つたわよ。御覧よ、まあ恐ろしく大きな袋だこと！ あの一ひとの流しはあたし達みたいぢやないわね。この中には屹度、両方とも仔羊の四つ割が一つづつは入つてると思ふわ。腸詰や麵麩だつたら勘定も出来ないくらゐよ。豪勢ね！ 祭りの間ぢゆう鱈腹食べられるわ。」

「これ、鍛冶屋の袋？」と、オクサーナが口をはさんだ。「あたしの家へでも曳きずつて行つて何が詰め込んであるのか、しらべて見ようぢやないの。」

一同はキャツキャツと笑ひながら、その提案に賛成した。

「だつて、あたし達にはとても持ち上げられやしなくつてよ！」一同は袋を動かさうとして一生懸命になりながら、急にさう叫び出した。

「ちよつとお待ちなさいよ。」と、オクサーナが言った。「ひとつ走り家へ行つて、櫓を取つて来て、櫓に積んで運びませうよ。」

そこで一同は櫓を取りに駆け出して行つた。

捕虜たちには袋の中にちぢこまつてゐるのがひどく退屈になつた。尤も補祭は密かに指でかなり大きな穴を開けたので、もう少し人氣ひとけさへなかつたなら、或は機会をりを見て這ひ出してゐたかも知れないが、人前で袋の中から這ひ出したりしては、いい笑ひものになるから……と考へて彼は思ひとまつた。で彼は、チューブの不躰けな長靴の下で、じつと息を殺しながら、時の来るのを待つことに覺悟をきめた。チューブはまたチューブで、自分の足の下に、何か恐ろしく腰かけてゐるのにぎこちないもののあることに気がついて、これまた少なからず、自由の身になることを望んでゐた。ところが今、自分の娘の下した決議くだを耳にすると、すつかり安心してしまつて、どうせ自分の家までは少くとも百歩なり、二百歩なり歩かねばならないのだからと考へて、袋から這ひ出すことを思ひとまつた。いま這ひ出したりすれば、みなりは直さねばならず、裘コジューブ衣の釦を掛けたり、帯を締め直したり——いやはや、どれだけ面倒な仕事があることだらう！ それに帽子はソロハの家へ置いて来てしまつたし。ままよ、娘つ子が櫓で運んでくれるのに委せることだ——さう

彼は考へたのである。

ところが、事態はチューブの全く予期せぬ結果になつた。ちやうど娘たちが櫓を取りに駈け去つたのと同じ時刻に、瘦やせつぽの神父クームが、いやに取り乱した、不機嫌な顔をして酒場から出て来た。酒場の女主人が頑として彼に貸売を承知しなかつたためだ。彼はひよつと誰か信心深い貴族でも来あはせて一杯振舞つて呉れるまで、じつと酒場で待つてゐようかとも思つたが、折悪しく、申しあはせたやうに貴族といふ貴族がみんな我が家に居残つて、堅気な基督教徒らしく、てんでの家族といつしよに蜜飯クチャを食つてゐた訳だ。神父は酒商売をしてゐる猶太女の汚ない根性と木石のやうな情つれなさを忌々しく思ひながら、とぼとぼと歩いてゐたが、はたと袋につまづいて、びつくりして立ちどまつた。はて、誰だかえれえ袋を道のまんなか放つて行きをつたぞ！ と、四方から仔細に眺め、屹度この中にやあ豚肉が入つとるぞ。どいつだか運のええ奴が、流しでしこたま詰め込みやあがつたな！

どうも、おつそろしい袋ぢやて！ まあ、この中に蕎グレチャ麦ニーニク麵コルジュと揚煎餅ばかり詰まつてゐるにしても豪勢だが、これがみんな扁平麵パリヤニーツァだつたら、占めたものだ。あの猶太女め、扁平麵パリヤニーツァ一つで火酒ウオツカを一杯づつはよこすからな。誰にも見つからないうちに、早く持つて行かう。

そこで彼は、チューブと補祭の入つてゐる袋を肩へしよつて見たが、それがどうも実に重い。いや、これあ一人ではとても運びきれん。と、彼は弱音を吐いた。やあ、ちやうど好いところへ織匠はたやのシャプワレンコがやつて来をつたぞ。「よう、オスタープ、今晚は！」

「今晚は。」と、織匠はたやは立ちどまつて返辞をした。

「どこへ行くだね？」

「いや別に。ぶらぶらしてゐるだけで。」

「お前さん手を貸してお呉れな、この袋を運ぶんだよ！ どいつだか流しでしこたま貫ひ集めておいて、こんな道の真中へ棄てて行きをつたのぢや。儲けは山分けにするよ。」

「袋だつて？ 何が入えつてるだね、白麵クニシユ麴パリヤニーツァか、それとも扁平パリヤニーツァ麵麴クニシユでも入えつてるだね？」

「うん、いろいろ入つとるらしいだよ。」

そこで二人は、手早く籬まがきから杭を二本ひき抜いて、それへ袋を一つ載せると、肩に担いで歩き出した。

「いつたい何処へ持つて行くだね、酒場へ行かうか？」と、途中で織匠はたやが訊ねた。

「それあ、おらもさう思はんでもねえだが、あの忌々しい猶太女め、てんでおれを信用しをらんのぢや。それでまた何処ぞで盗んで来たんだらうなどと、疑ひをかけるかも知れんと思ふのさ。それにおれはたつた今、その酒場から出て来たばかりだな。これはおらの家へ持つて行くことにしよう。誰も邪魔者はゐねえだから。なあに、女房かかあも家にやゐねえんでね。」

「おかみさんが留守だつて、それあ確かなことかね？」と、用心深い織匠はたやは念を押した。

「お蔭で、まだそれほど耄ほけちあるねえよ。」と、教父クームが言つた。「あいつのゐるとこへ、のめのめと帰えつて堪るもんけえ。おほかた夜明けまで婆あ仲間とほつつき　つてやがるだらうよ。」

「誰だい？」と、表口へ二人の仲間同士が袋を担ぎこんだ物音を聞いて、教父の女房が家の中から戸を開けて呶鳴つた。

教父クームは立ちすくんでしまった。

「そうら見なせえ！」と、がっかりして織匠はたやが呟やいた。

教父クームの女房は世間によくある型のかみさんだつた。亭主とおなじやうに、彼女も殆んど家にはゐないで、まるで日がないちんち中、おしやべり仲間や金持の老婆の家へ入りびた

つて、おべんちやらを並べながら、ガツガツと物を食つてゐたが、朝の間だけは亭主とよくい唾みあひをやつた、といふのは、朝だけは教父クームと顔をあはせることが間々あつたからで。彼等の家は郡書記のはいてゐるシヤロワールイ寛袴の二倍も古びてゐた。屋根にはところどころ藁も無い処があつた。籬はといへば、きまつて誰も彼もが外へ出るとき、犬除いぬよけの杖を持つて出ずに、教父クームの家の菜園を通りすがりに手頃の杭を引つこ抜くものだから、ほんの残骸を留めてゐるに過ぎなかつた。煖炉ペチカも三日ぐらゐは焚かれなことがあつた。この優しい奥方は、氣前の好人々を拝み倒して手に入れた品は何によらず亭主の眼の届かぬところへ蔵しまひこみ、時たま亭主が酒場で呑みあまして来た小銭まで巻き上げてしまつた。教父クームはいつもの無頓着さにも似げなく、女房には負けてゐなかつたので、何かといへば必らず、眼の下に血紫斑ちあざをつけて家から逃げ出した。それでゐて、この有難いかみさんは、溜息をつきながらほつつき　つて、自分の亭主のだらしなさや、自分がどんなに酷い仕打を我慢してゐるかといふことを、婆さん仲間に吹聴して歩いたものだ。

これだけ話せば、この思ひがけない女房かみさんに飛び出されて、織匠はたやと教父クームがどんなにおつ魂消たかは、蓋し思ひ半ばに過ぐるものがあらう。彼等は袋を下へおろすと、それを後ろへ庇ふやうにして、裾で隠さうとしたが、既に手遅れだつた。もう老の眼が、いい加減う

とくなつてゐたにも拘らず、教父の女房は疾くもその袋を見つけてしまった。

「これあほかつたよ！」と、禿鷹が有卦に入つたやうな顔つきで彼女が言つた。「おやおや、そんなに、よく流して来なすつただねえ！ 堅気な衆といふものは、いつでもかうなくつちやならないのさ。だが、ひよつと何処かでかつぱらつて来たんぢやあるまいね。さあ妾にお見せ、早くその袋を妾にお見せといつたら！」

「額の禿げあがつた悪魔なら知らぬこと、おいらは見せねえよ。」と、虚勢を張りながら教父クームが言つた。

「お前さんに何の用があるだね？」と、織匠はたやも口を挿んだ。「これあお前さんのぢやなくつて、あつしたちが流して来たんだぜ。」

「いんにや、妾にお見せつたら、この碌でなしの呑み助野郎め！」さう呶鳴るといつしよに、女房は、のつぽの教父クームの顎へ拳骨を一つ喰はせておいて、いきなり袋へ飛びかかつた。

しかし織匠はたやと教父クームは勇敢にも袋をかばつて、彼女を遮二無二後ろへ突き戻した。だが、二人がほつとする暇もなく、女房は土間へ降りて、火搔棒を手にしてゐた。そして逸早く亭主の両手と、織匠はたやの背中とへ火搔棒で一撃を与へておいて、袋の傍へ駆け寄つた。

「何だつて、かみさんに勝手な真似をさせるだね？」と、我れに返つた織匠はたやが苦情を言つ

た。

「へつ、勝手にさせるもねえもんだ！ ぢやあ、なんだつておめえ、彼女を近づけてしまったのだい？」クーム 教父は冷やかにさう答へた。

「あんたとこの火搔棒は鉄ぢやと見えるね！」暫らく黙つてゐた後、背中をさすりながらはたや 織匠がが言つた。「うちの女房かかあが去年の市いちで二十五哥カベイカ出して買つた火搔棒は、こんなに……痛かあねえだが……。」

一方、勝ち誇つた女房は、床にカガニエツツ油燈をおいて、袋の紐を解くと、早速なかを覗いた。ところが、さつき、あんなに目ざとく袋を見つけた、さすがの彼女の老の眼も、今度ばかりは確かに鈍つてゐたらしい。

「へつ、この中にやあ、野豚がまるまる一匹入つてゐるよ！」さう喚わめきざま、彼女は嬉しさのあまり手を拍つた。

「野豚だと！ おい、まるまる一匹の野豚だとよ！」さう言つて、はたや 織匠は教父をゆすぶつた。「だが、何もかもお前さんのせるだよ！」

「どうしやうがあるもんけい！」さう言つて教父は肩をすぼめた。

「しやうがないつて？ 何をおいらは、ぼんやり突つ立つてるだ？ 袋を取りかへさにや

あ！ さあやらう！」

「さあ、退いてお呉れ！ とつとと退いてお呉れ！ これあ、あつしらの豚だよ！」と、織匠はたやは前へ飛び出しながら叫んだ。

「どきやあがれ、くそ婆あめ！ これあ手前のもんぢやねえぞ！」と、クーム教父も詰めよりのがら呶鳴つた。

女房は再び火搔棒に手を掛けたが、ちやうどその時、袋のなからチューブが這ひずり出して、たつた今、長い眠りから眼が覚めたといはんばかりに、伸びをしながら、玄關のまん中にぬつと突つ立つた。

クーム教父の妻は膝を叩いて、あつと叫んだ。一同も思はず口をあんどり開けた。

「どうでい、この馬鹿女めが、野豚だなんて吐かしやあがつて！ こんな野豚があるけえ！」クーム教父は眼を剥きながら、さう言つた。

「ちえつ、飛んでもねえ人間を袋へ押し込めたものだ！」と、魂消て後ずさりをしながら、織匠はたやが言つた。「なんとでも好きなことを言ひなされだが、これあ、てつきり悪魔の仕業に違えねえぜ。第一これあ、窓から這ひ出すこと一つ出来ねえ人だもの！」

「これあ教父おしつつあんでねえだか！」と、じろじろと相手を見詰めながら教父が喚いた。

「してお前、このおれを誰だと思つたのだい？」とチューブがにやにやしながら言った。

「どうだいお前方、うまくおらにかつがれたでねえか。だが、あぶなくお前たちに豚と間違へて食はれてしまふところだつたよ。待ちな、お前たちを喜ばせることがあるだよ。この袋ん中にやあ、まだ何か入えつてるだよ。野豚でなきやあ、屹度、仔豚か何か、ほかの家畜ものに違えねえ。おらの尻の下でしよつちゆう、何かもぞしてゐよつただから。」

それつとばかりに、織匠はたやと神父クームが袋へ飛びついて行くと、この家の女主人かみさんも反対がはから掴みかかつたので、もはや逃れ難きを覚つた補祭が、その時、袋の中から這ひ出さなかつたものなら、再び猛烈な争奪戦が盛り返されるところだつた。

おつ魂消た神父クームの妻は、あはや袋の中から引つぱり出さうとして掴んでゐた補祭の足を手ばなした。

「おや、まだひとり入えつてゐたんだな！」と、織匠はたやが仰天して叫んだ。「いつたい何が何だかさつぱり分らねえ……。頭がグラグラして来らあ……。腸詰でもなければ、扁平パリヤニーツ麵アでもねえ、生きた人間を袋へ詰め込むなんて！」

「おや和尚おつさんでねえか！」と、誰よりも甚く度胆を抜かれて、チューブが口走つた。

ええ忌々しいつたら！ あのソローハの性悪婆あめ！ 人を袋ん中へ押し込めやあがつ

て……ほんにさう言へば、彼女あいつのところにもやあ、袋がぎらにあつたつけ……。うん、今こそ何もかも読めたぞ、あの袋には、どれにも、二人づつの人間が入えつてゐたんだな。おれは又、彼女あいつがおれだけに何をしてをるとばかり思つてゐたのに……。ほんにほんに忌々しいつたらねえ、あのソローハめ！

*

*

*

娘たちは袋が一つ無くなつてゐるのを見て、ちよつと怪訝に思つた。

「仕方がないわ、あたし達にやあこれだけで沢山ぢやないの。」さう、オクサーナが口早に言つた。

一同は総がかりで袋を持ちあげて、櫛に載せた。

村長は心の中で、もし自分が袋の口を解いて自由にして呉れなどと呶鳴らうものなら、馬鹿な娘たちのことだから、きつと袋の中には鬼でも入つてゐると思つて、逃げ出してしまふだらう、さうなつたが最後この往來のまんなかに、てつきり朝までは放つて置かれなきやなるまい、さう思つたので、一切口をきかぬことに肚を決めた。

その間に娘どもは仲よく手をつなぎあつて、軋みを立てる雪の上を、まるで旋風のやうに橇を引いて疾走して行つた。娘たちの多くは、ふざけて橇に乗つかつたりしたが、中には村長の上へのしかかつたりする者もあつた。けれど村長は何事もじつと我慢するより他はないと諦らめた。

やがて家へつくと、入口の扉をいつぱいに開けはなして、笑ひさざめきながら袋を中へ引きずり込んだ。

「さあ、この中に何が入つてるか見てやりませうよ。」さう叫んで、一同はいきなり袋の口を解きにかかつた。

この時、袋の中にすくんでゐる間ぢゆう、村長が我慢に我慢をしてゐたくしやみの発作がいよいよ激しくなつて、たうとう彼は、思ひきり大きくくしやみをして咳き込んでしまつた。

「あら、この中には誰か人が入つてるのよ！」さう叫びざま、娘たちは驚いて、戸の外へ逃げ出してしまつた。

「どうしたつてんだね、お前さん方は、きちがひ狂人のやうに駈け出したりして？」と、その時、入口へ入つて来たチューブが声をかけた。

「まあ、お父つあん！」と、オクサーナが言った。「あの袋の中に誰かしら入つてゐるのよー！」

「袋の中に？　　いつたい何処からこんな袋を持つて来たんだ？」

「鍛冶屋が道の真中に棄てて行つたのよ。」と、みんなが異口同音に答へた。

ふうむ、さうか。言はねえこつちやないて……　と、チューブは肚の中で頷いて、「何をビクビクしてるだ。ひとつ中を調べてみようでねえか——さあさあ袋ん中の御仁へ——どうか名前と父称でお呼び申さないことを悪く思はんで下さいよ——さあ、袋から出ておくんない！」

村長が外へ這ひだした。

「わあつ！」と娘たちは金切声をあげた。

村長までがこんな中へ入つてやあがつたのだな　と、いささか呆れ顔で、相手を頭の天辺から足の爪先まで、じろじろと眺めながら、チューブは口の中で呟やいた。「これあどうも！……うへつ！……」それ以上、彼は何も言ふことが出来なかつた。

村長の方も負けず劣らず狼狽してゐたので、どう切り出したらいいか、さつぱり見当がつかなかつた。

「きつと、戸外は寒いことだらうね？」彼はチューブの方をむいて、そんなことを言った。「かなりの凍いてで。」と、チューブが答へた。「それはさうと、靴には何を塗りなさるだね、スマーレツ脂か、それとも煙脂タールかね？」彼はそんなことを言ふつもりではなく、どうして村長はこんな袋の中へ入つてゐなすつたので？ と訊きたかつたのに、まるで見当ちがひなことを言ひ出してしまつたのが、我ながら合点がゆかなかつた。

「煙脂タールの方が良いやうだね。」と、村長は答へた。「ぢや、御免よ、チューブどん！」さう言つて、ぐつと帽子を目深くかぶると、彼は戸外そとへ出て行つた。

「おれとしたことが、なんだつて馬鹿な、靴には何を塗りなさるなんて村長に訊ねたもんだらう！」と、チューブは村長の出で行つた戸口をじつと睨かみながら呟つぶやいた。「ええい、くそつ、ソローハの阿女あまめ！ なんちふ奴を袋かん中へなんぞ隠かくまひをつたのぢや！……ちえつ、くそ婆あめ！ ぢやが、おれはまた馬鹿な……。それはさうと、あの忌々しい袋は何処へやつたのぢや？」

「隅つこへ投げ込んでおいたわよ、もうあん中にはなんにも無かつたわ。」さうオクサーナが答へた。

「その何にもないちふぺてんをおれはよう知つとるぞ！ ここへ持つて来な、あん中には

まだもう一人は入つとる筈ぢや！ ようく振るつて見な……。なんだと、何もねえつて？
忌々しいくそ婆あつたらないて！ その癖、あいつは、まるで猫とと食はぬ、お聖人様
みてえな面をしてやがるんだ……。」

しかし、チューブが暇にまかせて憤懣を吐き散らしてゐる間に、われわれは鍛冶屋の方
へ眼を移して見ることにしよう。時刻はもう、かれこれ九時ちかくにもなつたらうから。

*

*

*

初めのうち、ワクーラは怖いやうに思った。殊に地上の物が何ひとつ見えないほど高く
昇つて、まるで蠅のやうに、月の下をすれすれに飛び過ぎる時などは、ちよいと身を屈め
なかつたら、危く月に帽子をひっかけてしまふところだったので、彼ははらはらした。だ
が、暫らくすると彼もすつかり元氣になつて、そろそろ悪魔をからかひはじめた。（彼が
自分の頸にかけてゐた絲杉の十字架をはづして悪魔の方へ差し出すと、悪魔はくしやみを
したり咳をしたりする——それが面白くて堪らなかつた。彼がわざと頭を掻く振りをして
手をあげても、悪魔は自分に向つて十字を切られるのではないかと思つて、一層はやく翔

つた。空はすっかり明るかった。フハフハした銀いろの靄のたちこめた大気は透明で、何もかも手に取るやうに見えることが出来た。壺の中に坐つたまま、疾風のやうに傍を飛びすぎる魔法使の姿や、一と塊りになつて鬼ごっこをしてゐる星の群れや、また一方にうじやうじやと雲のやうに渦巻いてゐる精霊の一団や、月光の前で踊りながら、自分の同族の肩車に乗つて駈けすぎる鍛冶屋に向つて帽子をとる別の悪魔や、ウエーチマ妖女がまさしく何処か用事のある処へ乗つて行つたらしい筈がひとり翔んで後へ引つ返しつゝあるのまで、はつきりと認めることが出来た。そのほか様々の有象無象に彼等は出喰はした。どれもこれも鍛冶屋を見ると、一瞬間、その場に立ちどまつて、まじまじと彼の顔を眺めるが、やがて通りすぎてしまふと、まためいめいの運動をつづけた。鍛冶屋はずんずんと翔んで行つた。と、不意に彼の眼の前に、いつぱい灯の点つた彼得堡ペテルブルグが現はれた。(ちやうどその時、何かの機会でイルミネーション万光飾が施こされてゐたのだ。)関門を通りすぎると同時に、悪魔は馬の姿にかたちを変へたので、鍛冶屋は市まちの真中を駿馬に跨がつて駈けてゐる自分を見出した。

いやどうも！ その喧々囂々たる賑はひと、きらびやかさといつたら！ 両側には四階建の大廈高樓がによきによきと聳え立ち、馬蹄の音や車輪の響きが霹靂のやうに轟ろきわ

たつて四方から反響こたまとなつて跳ね返つて来る。建物は恰かも地中から生え出て一步は一步と高まつてゆくかと思はれ、橋はどよめき、馬車は飛び、辻イスウォスチック馬車屋や馭者は喚きたて、積雪は八方から飛んで来る無数の櫓の下でシューシューと鳴り、行人は油燈で照明を施かした家々の下を押しあひへしあひして、その頭が煙突や屋根にまでとどくやうな厩大な陰影かげが壁面にゆらゆらと映つてゐる。

すつかり度胆をぬかれて、鍛冶屋はキョロキョロと八方を見まはした。彼にはあらゆる家々がその数限りない灯の眼まなこでカツと自分を睨みつけてゐるやうに思はれた。羅紗表の毛皮ユーパー外套を著こんだ貴顕紳士がさらに眼につくので、いつたいどの人に帽子を脱るべきか、頓と彼には分らなかつた。おお神様！ この市まちには一体どれだけ旦那衆があることだらう！ そんな風に鍛冶屋は考へた。おほかた毛皮シユーパー外套を著て街を歩いてゐる人は、どれもこれも、みんな陪審官に違ひない！ 又、ああいふ硝子窓のついた素晴らしい馬車を駆つて行く人々は市長でなければ、てつきり警察部長か、それとも、もつともつと身分の高い衆に違ひない。彼のかうした思索の絲は不意に、悪魔の質問に依つて断ち切られた。『女帝の御殿へまつすぐに参内するのでございますか？』 いや、それはちよつとおつかない と、鍛冶屋は考へた。何処か知らないが、こちらに、この秋デイカーニカを通つ

たザポロージエ人の一行が逗留してゐる筈だ。あれは*セーチから女帝へ捧呈する上奏文をもつて来た連中だ。ともあれ、あの連中に相談して見よう。さう思つたので、「こりや下道！ さあ、おれの衣囊かぶしへ入つてしまへ、そしてザポロージエ人のところへ案内するのだ！」

セーチ 哥薩克軍の本營で、主としてドニエールの中流にある島嶼、ザポロージエに置かれてゐた。

すると悪魔のからだは見る見る痩せ細つて小さくなり、何の苦もなく彼の衣囊かぶしへ入つてしまつた。そしてワクーラは、前後を振りかへる暇もなく、いつの間にか或る大邸宅の前へ来てゐた。自分ながら何が何やら分らぬまま、彼は階段を登つて扉をあけたが、立派な飾りつけの部屋の中を覗くと、まぶしさに思はずちよつと後ずさりした。しかし現に今、絹張りの長椅子デイヴァンの上に、樹脂を塗つた長靴ばきで胡坐をかいて、俗にコレシユキといふ最も強烈な煙草をスパスパ喫つてゐるのが、ディカーニカを通つた件くだんのザポロージエ人たちに違ひないのを見て、ほつと安心した。

「旦那がた……御機嫌よろしう！ 何とまあ、不思議なところでお目にかかるではございませんか！」傍へ近よつて、地べたにつくほど丁寧なお辞儀をしながら、かう鍛冶屋が挨拶

搦をした。

「これあ、いつたいどういふ仁ぢやな？」と、鍛冶屋のすぐ前に坐つてゐた一人が、その向ふに坐つてゐる同僚を顧みて訊ねた。

「おや、お見忘れですかい！」と、鍛冶屋が言つた。「私ですよ、鍛冶屋のワクーラですよ！ この秋、デイカーニカをお通りになつた折に、（どうか御壮健で御長命のほどを祈ります）私どもでまるまる二日も御鼻負を願ひました。それぞれ、その節、幌馬車キビートカの前輪の鉄箍かなわをおつけ申しました鍛冶屋めで！」

「ああ！」と、同じザポロージエ人が言つた。「あの絵の上手な鍛冶屋ぢやつたのう。いや御機嫌よう、同胞きやうだい！ それはさうと、どういふ風のふきまはしでこちらへやつて来たのぢや？」

「それあなんですよ、その、ひとつ見物がしたいと思ひましてね。さういふぢやございませんか、何でも……。」

「どうぢや、同胞きやうだい、」そのザポロージエ人は勿体振つて、自分が大露西亜語を操ることが出来るのを見せびらかすつもりで、かう言つた。「なんと、はんかな都ぢやらうが！」
鍛冶屋は味噌をつけたり、赤毛布のやうに思はれるのが癪でもあつたし、それに、前に

もちよつと述べたやうに、實際、彼は識者らしい言葉づかひを知つてゐたので、「名にしおふ首府みやこですからね！」と、澄まして応じた。「何とも言葉はありませんて、建物は宏荘ですし、立派な絵は到るところに懸つてをりますし。それにおつそろしく金箔をつかつた文字をベタ一面に書きつらねた家が無性にあるぢやありませんか。何とも言ひやうの無い、素晴らしい均斉美といふやつで！」

こんな風に、流暢な鍛冶屋の弁舌を聴かされると、ザポロージェ人たちは鍛冶屋にとつて大變有利な解釈を下した。

「ぢやあ、又あとでゆつくり話さうのう、同胞きやうだい。わしたちは、これから女帝陛下に拝謁のため参内するところぢやから。」

「女帝陛下に拝謁ですつて？ それぢやあ、後生ですから、私もいつしよに伴れて行つて下さいませんか！」

「なに、お前を？」と、ちやうど、ほんもの大きな馬に乗せよと言つて駄々をこねる、四つぐらゐの子供でもすか賺しなだめる小父さんといった調子で、ザポロージェ人が答へた。

「お前が宮中へなど参内してどうしようといふのぢや？ いかん、駄目なことぢやよ。」かう言つた時、彼の顔にはさも勿体らしい表情が浮かんだ。「わしたちはな、同胞きやうだい、

その、陛下に自分たちのことであるいろいろ奏上せねばならんのぢやから。」

「お供をさせて下さいよ！」と、鍛冶屋は言ひ張つた。そして拳で衣囊かぶしを叩きながら、そつと悪魔に囁やいた。 承知させて呉れ！

彼がさう言ふか言はないに、もう一人の方のザポロージェエ人が、「まあ、いいから伴れて行つてやらうではないか、同胞きやうだい！」と、とりなした。

「さうよ、伴れて行かうよ！」と、他の一同も声を揃へて言つた。

「ぢやあ、わしたちとおんなじ衣裳じゆうぱんをつけるがよい。」

鍛冶屋が大急ぎで草いろの長上衣じゆうぱんを身につけた時、不意に扉があいて、金モールをつけた迎への役人が入つて来て、参内の時刻だと告げた。

大きな箱馬車に乗つて、弾機ばねに揺られながら出かけると、またしても鍛冶屋の眼にはあらゆる珍らしい光景が映りだした。両側の四階だての家並がずんずん、後へ後へと駈け去り、鋪石道しきいしみちはがらがらと轟ろきながら、ひとりでに馬の足もとへ、前方から驀進して来るやうに思はれた。

ひやあ、どうもはや、これは何といふ燈火あかりだらう！ と、鍛冶屋は心ひそかに眩やいたものだ。 村ぢやあ昼間だつて、かうは明るくないのに。

馬車は宮殿の前で停つた。ザポロージエ人たちは車を降りて、壮麗な御車寄へ歩を進め、まぶしいほど光り輝やいてゐる階段を登つて行つた。

何といふ素敵もない階段だらう！ と鍛冶屋は胸の中で呟やいた。 足で踏むのは勿体ない。 実にどうも、この装飾かざりはどうだ！ よく話半分といふけれど、何が半分どころか！ これはどうだい！ 何といふ素晴らしい欄干だらう！ この細工はどうだ！ この鉄材だけでも、五十留ループリがものは要いつとるぞ！

階段を登りきつたザポロージエ人たちは、第一の大広間を横切つた。鍛冶屋は嵌木床パルケットのうへで迂りはせぬかと一歩々々に心を配りながら、びくびくして一同の後に従つた。さういふ大広間を三つも横切つたが、鍛冶屋は相も変らず仰天しつづけてゐた。四つ目の大広間へ入ると彼は、その壁に懸つてゐた額面へ、我を忘れて近寄つた。それは童児基督を抱いた聖母の像であつた。

何といふ絵だらう！ 実に素晴らしい画像だ！ と、彼は心の中で感歎した。 今にもほんとに物を言ひさうだ！ まるで生きてゐるやうだよ！ それにこの神の御子はどうだい！ 手を抑へて、にこにこしてるよ、いぢらしい！ だが、この顔料素のぐはどうだ！ ほんとおつ魂消るやうな顔料だ！ 茲にやあ泥絵具なんてこれっぽちもつかつちやあない、

これはみんな上等の羣青や朱だ。それにこの空色はどうだい、まるで燃えるやうぢやないか！ 大したもんだ！ 屹度、飛び切り極上の胡粉で下塗りがしてあるんだらうな。だが、この彩色にもおつ魂消るけれど、この銅あかの把手と来ちやあ、さう言ひながら彼は扉に近づいて、錠前に触つて見るのだつた。これはまた、もう一つ吃驚するて、実にどうも、きれいな細工つたらないよ。これあなんだな、みんな独逸の鍛冶屋が、費用かまはずにやつてのけた仕事に違ひない……。

金モールをつけた従僕が彼の腕を小突いて、他の同行者たちに遅れないやうにと注意しなかつたら、恐らく鍛冶屋はもつともつと鑑賞に耽つてゐたことだらう。ザポロージエ人の一行は更に二つの大広間を通り過ぎてから立ちどまつた。そこで待つてゐるやうにといふ指図だつたのである。その大広間には、金ピカの刺繡ぬいを施ぬした軍服を著た將軍が幾人も集まつてゐた。ザポロージエ人たちは四方八方へペコペコとお辞儀をした。そして一塊りになつて立つてゐた。

一瞬間の後、でつぷりと肥満ふとつた、背丈の堂々たる人物が、哥薩克大総帥の制服に黄色い長靴といふ扮装いでたちで、大勢の随員をしたがへて現はれた。彼の頭髮はもちやもちやに乱れ、片方の眼が少しやぶにらみで、いつたいにその顔つきには、どことなく驕慢不遜の色

が現はれ、すべての動作ものごとに命令的な癖が見られた。それまでかなり横柄に振舞つてゐた、金ピカ服の將軍連は、俄かに齷齪とし始め、いやにびよこびよこしながら、その人物の一言半句はもとより、些細な身振りにまで注意して、奔命これ務めるといつた様子が見られた。しかし大総帥は、そんなことにはまるで関心をもたぬもののやうに、ちよつと頷をしやくつておいて、ザポロージエ人の方へつかつかと進みよつた。

ザポロージエ人たちは一斉に最敬礼をした。

「これで一同おそろひかな？」と、少し鼻にかかる声で徐ろに彼が訊ねた。

「はい、皆々そろつて居りまするので、閣下！」と、ザポロージエ人たちは、更に敬礼をしなほして答へた。

「わしが教へたとほりの言葉づかひを忘れないやうにな！」

「はい、閣下、忘れはいたしませぬ。」

「これは皇帝ツァーリですかい？」と、鍛冶屋はザポロージエ人の一人に、そつと訊ねた。

「皇帝ツァーリつちふことがあるものか、お主ぬし！ これあ、*ポチョームキン元帥だよ。」と、その男が答へた。

ポチョームキン（グリゴリー・アレクサンドロキツチ、1739—1791） エカテ

リーナ二世時代の頭官で、青年時代より軍籍に身を委ね、女帝の親任を受けて権勢並びなき高位を贏ち得た人。一七七四年、土耳其戦役の軍功により陸軍大將に任ぜられ、参謀次長に補せられたが、土耳其との講和後、伯爵の位を賜はり、ノゾオロシヤ新露西亞の総督になった。一七八三年、クリミヤを露西亞に帰属せしめ、黒海沿岸の防備を強化し、ヘルソン、フェオドシヤ、セワストーポリ等の商港を開き、大いに南方治政に貢献した功により、翌年、陸軍元帥、参謀総長に任ぜられた。一七八七年、エカテリーナ女帝を懲憚して南部新領土への行幸を實現したが、その後、他の寵臣のため女帝の信任が己れを離れたことを知り、一旦締結された土耳其との講和を破棄し、再び戦端を開かんと企て、南露ニコラエフに向ふ途中、病歿した。

次ぎの部屋に人声がして、長い裳裾を引いて繻子の衣裳を着けた貴婦人や、金糸で刺繍をしたカフターンを着て、髪を後ろでつかねた宮内官が大勢入つて来た時には、鍛冶屋は視線の向けどころにすつかりまごついてしまった。彼の眼にはただキラキラと燦やく光りが映つただけで、それ以外のものは何ひとつ見えなかつた。

ザポロージェ人たちは一斉に床の上に平伏して、異口同音に『御免なされませ、陛下！』

御免なされませ！」と、叫び出した。

鍛冶屋は何のことやらさつぱり分らぬままに、恐ろしく躍起になって、やはり自分も床の上に這ひつくばつてしまった。

「お待ち！」さういふ、威あつて猛からぬ、いとも爽やかな声が彼等の頭上で聞えた。一二の宮内官があわててザポロージェエ人たちの肩を揺ぶつた。

「恐れ多うござりまする、陛下、起つことはなりません！ 金輪際、起つことはなりません！」とザポロージェエ人たちが叫んだ。

ポチヨームキンは唇を噛んだ。つひに自身でザポロージェエ人の一人に近づいて、命令的に何か囁やいた。と、ザポロージェエ人どもは起ちあがつた。

ここで鍛冶屋は勇を鼓して顔をあげた。と、彼の眼前には、髪白粉をふりかけて、少し肥りじしの、背の低い婦人が、碧いろの眸に鷹揚で、にこやかな眼差を見せて佇んでゐた。その眼差には、何ものをも屈服せしめずには措かぬ威厳がそなはつてゐて、これこそ雲上の位にある女性にのみ特有のものであつた。

「伯爵が今日、妾がまだこれまで知らなかつた御身たちに会はせると約束されたのぢや。」と、碧い眼の貴婦人は物珍らしさうにザポロージェエ人達を眺めながら言つた。「どうぢや、

こちらでは御身たちを良くもてなしてをるかの？」彼女はさうつづけながら、更に間近く進みよつた。

「はつ、有難き仕合せにござりまする、陛下！ 食糧は申し分のない品を支給されて居りまする、尤も当地の羊肉はわれわれザポロージェエの品とは、まるで別物ではござりまするが——如何やうにもせよ、暮しの出来ぬことはござりませぬ……。」

ポチヨームキンはザポロージェエ人どもが、自分の教へておいたのとはまるで違つたことを喋るのを見て、洗面をつくつた。

一人のザポロージェエ人は勿体ぶつて前へ進み出ると、かう言つた。「陛下、恐れ多いことにござりまするが、われら忠誠なる陛下の臣が、何を以つて陛下の逆鱗に触れ奉りましたのでござりませうか？ われらが、あの穢れたる韃靼の輩らに味方したとでも仰せられるのでござりまするか？ それともわれらが、何ぞや土^{くみ}耳^み古人に与したとでも仰せられまするか？ 行為にせよ、思想にせよ、陛下に叛逆し奉つたことでもあると仰せられまするか？ 何のために御信任を失ひましたのでござりまするか？ さきには処々方々に砦を築いてわれらザポロージェエ軍に備へるやう詔勅を下し給はつたと漏れ承りまするし、その後にはまたわれらを^{カラビネール}獵兵に左遷しようとの御意ありとも承りました。然も今また新らし

き悲報を耳に致します。われらザポロージェ軍に何の罪科がござりまするか？ 陛下の皇軍みいくさに*ペレコープを無事通過せしめ、陛下の将卒のクリミヤ人討伐を援助いたしましたことでも、罪科なりと仰せられますか？……」

ペレコープ 南露タウリチエスカヤ県下の同名の郡の町で、クリミヤ半島の基部ペレコープ地峡に位する要所。

ポチヨームキンは無言のまま、その指にはめてあるダイヤモンドを小さい刷毛で無頓着に磨いてゐる。

「して、お身たちの望むのは何事なのぢや？」と、エカテリーナ女帝が下問された。

ザポロージェ人たちは意味ありげに互ひに顔を見あはせた。

ちやうどいい時だ！ 女帝は何の望みがあるかと訊ねてをられるのだ！ かう心の中で呟やいて、鍛冶屋はいきなり、床にひれ伏した。

「陛下、どうか御成敗をお下しなされませぬやうに、何卒御赦免の程をお願いいたしまする！ 誠に恐れ多い限りでござりますが、陛下の御おみあし足に穿かせられました、その御靴はそもそも何によつて製せられたものでござりまするか？ つらつら考へまするに、世界広しといへども、これだけの仕事の出来る靴屋は他には一人もござりますまい。ほんにま

あ、このやうな靴をば宿の妻に穿かせることが出来ましたなら！」

女帝はにつこりとほほゑまれた。廷臣たちも同じくほほ笑んだ。ポチヨームキンは苦い顔をすると共に、にやりとした。ザポロージエ人たちは、鍛冶屋が気でも狂つたのではないかと思つて、彼の腕を小突きはじめた。

「お起ち！」と、やさしく女帝が言はれた。「それ程に汝そちがこのやうな靴を望むのならば、その望みを叶へてつかはずに造作はない。これよ、直ぐさまこの者に最も高価な、金絲の刺繍をした靴をば一足持つて来てつかはせ！ほんとに妾には、この純朴さが気に入りました！ 喃、これ、」と女帝は、他の廷臣たちより少し離れて立つてゐた、*でつぶりして、すこし蒼白めた顔の人物に眼を注ぎながら、言葉をつづけられた。その人物は、身にとつた真珠の釦のついた質素なカフタンから推して、明らかに廷臣ではなかつた。

「御身の機智に富んだ筆には持つて来いの好題目ぢや！」

でつぶりして、少し蒼白めた顔の人物　これはエカテリーナ朝に於て劇作者として活躍したフォンウイージン（1745—1792）のことで、彼は純然たる露西亜喜劇、『旅団長』及び『未丁年者』の兩作に依つて文学史上不朽の名を残してゐる。彼の喜劇は人道的精神に立脚し、西欧心酔時代に於ける新旧兩タイプの時

人の欠点を指摘した諷刺劇で、ゴーゴリ以前に写実主義的精神を以つて書かれた露西亜喜劇として最初のものである。

「陛下よ、陛下の御仁慈のほど、誠に恐懼の至りにござりまする。されど、少くともこの場合、*ラフォンテーヌの筆ならではのと愚考いたしまする！」さう、真珠の釦をつけた人物が、会釈をしながら答へた。

ラフォンテーヌ (1621—1695) 十七世紀に於ける仏蘭西古典派最大作家の一人で、寓話詩人として知られ、その寓話詩十二巻に依つて不朽の名をとどめてゐる。

「いえいえ、まこと真実のこと、妾は御身の*ブリガディール旅団長には今なほ夢中なのぢや。それに御身の朗読はまことに見事ぢやから！ それはさて」と、再びザポロージェ人の方を顧みて、女帝は言葉をつづけられた。「聞き及ぶところでは、そち汝たちセーチでは決して結婚をいたさぬとのことではないか。」

ブリガディール旅団長 フォンウイージンの代表作 (前項参照)。

「どう仕りまして、陛下！ 人間が女房かかあなしで生きられぬことは、陛下も御承知ではござりませぬか。」と、先刻ワクーラと語り合つたザポロージェ人が答へた。それを聞くと鍛

治屋は、このザポロージエ人が正則な言葉を知つて居りながら、何故、女帝に向つて、わざと、普通に百姓言葉といはれてをる、最も粗野な物の言ひ方をするのだらうと、怪しんだ。老獺ずるい連中だ！ と心の中で彼は思った。屹度、これには何か魂胆があるのだな。

「われわれは僧侶ぼんずではござりませぬので、」と、ザポロージエ人は言葉を継いだ。「罪障の深い人間でござりまする。やはり情慾の道にかけましては、堅気な基督教徒のすべてと同様、から意地汚ない方でござりまして。われわれの仲間うちにも女房をもつてをる者は少くござりませぬ。ただセーチでは同棲してをりませぬだけの話で。波蘭に女房を置いてをる者もありますれば、ウクライナに女房を困つてをる者もあり、土耳其に女房を置くものもあります。」

ちやうどその時、鍛冶屋の手もとへ一足の靴が届けられた。

「これはこれは、何ともはや、実に見事な飾りで！」と、彼は有頂天になつて、その靴を推し戴きながら叫んだ。「陛下！ このやうなお靴をばお召しになつて、御心もそぞろに氷のうへをお江り遊ばします時の、その御足おみあしは、果してどんな御足おみあしでござりませうか？ どう内輪に見ましても、純白の砂糖でも出来てゐなくては叶ひますまいと存ぜら

れまするが。」

事実、極めて整つた、素晴らしい脚の持主であらせられた女帝は、このザポロージェ人の服装をした、色はすこし浅黒いけれど美男子と認めべき、朴訥な鍛冶屋の口から、かうしたお世辞をきいて、思はずにつこりと微笑まれた。

このやうな破格の優渥にすつかり有頂天になつてしまつた鍛冶屋は、女帝に対していろいろとつまらぬ、例へば、皇帝は蜂蜜や脂肪のやうなものばかり召し上つてゐるといふのはほんたうかなどといった愚問を、くどくどと連発しようとするところだつたが、ザポロージェ人たちが彼の脇腹を小突くのに気がつくと、はつとして口を噤んだ。そこで女帝が老人連にむかつて、セーチではどんな暮しをしてゐるか、どんな風習が行はれてゐるのかと、御下問になりだしたのを機会しほに、そつと後ろへ下つたワクーさがは、衣囊かぶへ口を寄せて小声で、少しも早くここから連れ出してくれ！ と言つた、その途端に彼はもう、彼得堡ペテルブルグの関門の外へ出てゐた。

*

*

*

「身投げをしたんだよ！ きつと、身投げをしたんだとも！ もし、身投げをしたのでなかつたら、この場に妾の足が吸ひついてしまつて、離れなくなつてもええだよ！」と街路とほりのまんなかになつと塊りになつたデイカーニカの女房連に混つてゐた、ふとつちよの織匠はたやのかみさんが喋り立てた。

「何だと、妾がなんぞや、嘘をついてゐるとでもいふのかい？ 妾が誰ぞのこの牛を盗んだとでも言ふのかい？ だあれも妾の言ふことをほんとにしないなんて、妾が誰かを呪つたことでもあるといふのかい？」と、哥薩克スチートカの長上衣スチートカを著こんだ、鼻の先きの紫色をした女が手を振りながら叫んだ。「あのペレペルチハ婆さんが、ちやんと自分の眼で、あの鍛冶屋が首を縊つてをるところを見なかつたといふのなら、妾やもう、いつさい水が飲めなくつても構はないのさ！」

「なに、鍛冶屋が首を縊つたんだと？ それあ、とんだことになつた！」と、チューブの家から出て来た村長が、足を停めて、お喋りの連中に擦り寄りながら、言つた。

「へん、火ウオツカ酒が呑めなくなつてもと言つた方がよからうよ、この酔つぱらひ婆さんがさ！」と織匠はたやの女房が応酬した。「あんたみたいな狂きちがひ気女きちがひでもなければ、どうして首を縊つたりなんぞ出来るものか！ あのひとは身投げをしたのさ！ 氷の穴から身を投げた

のさ！ それあもう、あんたがたつた今、酒場のおかみさんとこにゐたつてことよりも確かに妾や知つとるだよ。」

「この無恥女めが！ 何だつて人に逆らやあがるんだい！」と、猛々しく、紫いろの鼻をした婆さんが喰つてかかつた。「すつこんでやあがれ、この性悪女め！ お前んとこへ毎晩、補祭が通つてゐるのを、この妾が知らないとでもいふのかい。」

織匠はたやの女房は赫つとなつた。

「補祭がどうしたつて？ 補祭が誰んとこへ通ふつてんだい？ 何をお前さん、いい加減のことをいふんだい？」

「補祭だつて？」と、語尾を引つぱりながら、南京木綿の表を付けた兔皮のトウループ外トウループ套トウループを著こんだ梵妻おだいきくが、唾みあつてゐる女たちに詰め寄つた。「補祭などと吐かした奴に思ひ知らせてやるから！ 補祭つて言つたのあ誰だい？」

「そら、この女んとこだよ、お前さんの御亭主がちよくちよく通つとるのはね！」と、紫鼻の婆さんが、織匠はたやの女房を指さしながら、言つた。

「ぢやあ、お前なんだね、古狸め、」と、織匠はたやの女房に詰め寄りながら、梵妻が喚いた。

「お前だね、この妖女ウエーヂマめ、あのひとに霧を吹つかけて、穢きたない毒を吞ませて、あのひ

とを銜へこみくさつたのは！」

「どきあがれ、この夜叉め！」と、織匠はたやの女房は後退りをした。

「なにをつ！ この忌々しい妖女ウエーヂマめが、お前なんざあ、我が子の顔も見ずにくたばりくさるがええだ！ 碌でなしめ！ ちつ！」さういふと、梵妻はたやは織匠の女房の顔のまんなかへ唾を吐きかけた。

織匠はたやの女房も負けず劣らず仕返しをしようと思つて、ぺつと唾を吐いたが、それは目指す相手にはかからないで、この唾み合ひをもつとよく聴かうとして、顔をさし寄せてゐた村長の髭面ひげにまんまと、ひつかかつたものだ。

「ええ穢きたならしい、この婆あめが！」さう呶鳴つて村長は、着物の裾で顔を拭きながら、鞭を振りあげた。その劔幕に驚ろいた一同は、悪態をつきつき、ぱつと四方へ散つた。

「ええ、穢きたない！」と、顔を拭きながら村長が繰返した。それぢやあ、鍛冶屋は身投げをしてしまつたか！ ほんとなあ！ まつたく上手な絵描きぢやつたが！ 丈夫な小刀だの、鎌だの犁すきだのを鍛うちをつたになあ！ それに、ええ力持ちやつた！ ほんとに、と、思ひに沈みながら彼はつづけた。あんな人間はこの村にやあ稀らしいて。なるほどさう言へば、おれはあの忌々しい袋の中に入つてゐながら、可哀さうに奴さん甚くふさぎ

こんでるなと思つたつけが。ほんに可哀さうな鍛冶屋ぢや！ つい先刻までゐたものが、もう居なくなつてしまつたのか！、おれは、うちの牝馬の蹄鉄かなぐつを打たせようと思つてゐただのに……。かうした基督教徒らしい思ひに心をふさがれながら、村長はそろそろと自分の住居の方へ歩き出した。

同じやうな風説がオクサーナの耳に達した時、彼女ははつと胸を突かれた。彼女は、ペレルチハが眼のあたり見たといふことだの、女房連の取沙汰には、大して信用を置かなかつた。彼女は鍛冶屋が自分で自分の靈魂を滅ぼすやうな不信心者でないことをよく知つてゐた。しかし、まつたく、二度と村へ歸らぬつもりで、彼がどこかへ行つてしまつたのだとしたら、どうしよう？ あの鍛冶屋みたいな素晴らしい若者は、どうしてどうして、他に見つかるものぢやない。彼こそ彼女を飽くまで愛してゐたのだ！ 誰よりも辛抱づよく、彼女の氣紛れを我慢して来たのだ……。この美女は夜つびて上掛の下で輾轉反側して、一睡もすることが出来なかつた。時には、夜の闇のために彼女自身にさへ見えぬ蠱惑的な裸形をば、うんとふんぞらせながら、殆んど口に出して自分で自分を罵つた。さうかと思ふと、強いて平静を装ほつて、断然なにも考へまいと決心した。が、やはり思ひは同じところへおちてゆくのであつた。かうして、彼女の全心全靈は火のやうに炎えあがり、夜の

明ける頃には、夢中になつて鍛冶屋を恋ひ焦れてゐた。

ワクーラの運命に関して、チューブは何ら悲喜の色を表はさなかつた。彼の思ひはただ一つのことに占められてゐた——彼は何としてもソローハの不実を忘れることが出来ず、夢うつつの中ですら彼女を罵ることを止めなかつた。

やがて朝になつた。寺院の堂内は、まだ夜明け前から参詣の群衆で一杯だつた。白い被布つぎをかぶり、白い羅紗の長上衣を著た年寄りの女たちは、堂の入口ぎはで信心ぶかく十字を切つた。その前には、草いろや鬱黄コウフタの婦人服コウフタを著たり、また中には、うしろに金糸で觸角げの型を刺繡した水いろの波蘭婦人服クントウジュを著たりした貴族の婦人連が佇んでゐた。頭に相場相場の狂ふほどリボンリボンを巻きつけ、頸飾や十字架や古銭を頸に掛けた娘たちは、少しでも内陣ちかく割りこまうとしてあせつた。最前列には、口髭チユーブと房チユーブ髪をたくはへて、頤を剃りたてた、頸の太い貴族や普通なみの百姓たちが、ずらりと立ち並んでゐた。彼等の大部分はマントマンを著てゐたが、その下からは、白か、また中には紺スエートカの長上衣スエートカが覗いてゐた。おしなべて、どの顔にもこの顔にも、お祭り気分が漂つてゐた。村長は精進しやうじん落おちに食ふ腸詰しやうじんのことを思ひ出して、今からもう舌舐めずりをしてをり、娘つこたちは若者といつしよに氷のうへを迂まがる時のことを空想してゐた。老婆たちは、いつもより熱心に祈祷を唱へてゐた。哥薩

克のスウエルブイグーズが平伏して礼拝する音が、会堂ちゆうに響き渡つた。ただ一人、オクサーナだけは、祈るでもなく祈らぬでもなく、まるで我を忘れて佇んでゐた。彼女の胸には、腹立たしいやうな、悲しいやうな、様々な感情が渦巻いて、その顔にはただ激しい焦慮の色が漂ひ、眼には涙の露が顫いてゐた。その原因を判断する^{いはれ}ことの出来なかつた娘たちは、オクサーナの悩みの種が鍛冶屋のことにあらうなどは、夢想だにしなかつた。とはいへ、独りオクサーナだけが鍛冶屋のことに心を奪はれてゐたのではなかつた。村人のすべてに、何かしら物足らぬやうな、お祭りがお祭りらしくないやうな心持がされるのであつた。搗てて加へて、補祭は、あの袋の中の旅ですつかり声を噎らしてしまつたので、辛くも聞きとれるやうな噎がれ声を振り絞つてゐる有様であつた。なるほど新來の歌手は巧みに低^パ音部^スを勤めたには勤めたが、もしここに鍛冶屋がゐたものなら、とてもその足もとへも寄れることではなかつた。鍛冶屋といへばいつも、我等の父^{あまつつかひ}や、天津使^{あまつつかひ}が始まると同時に、頌歌席へあがつて、ポルタワで唄はれるのと同じ調べでうたひ出すのが常であつた。その上、寺の世話方の役を引き受けるのは専ら彼にきまつてゐたものだ。はやくも朝禱は終り、朝禱について、弥撒も終つた……。いつたい鍛冶屋はどこへ消え失せてしまつたのだらう？

*

*

*

その夜の残りの時間を、鍛冶屋を肩車にのせた悪魔が戻りの途を駈けに駈けたので、瞬く隙にワクーラは自分の家の傍へ運ばれてゐた。ちやうどその時、鶏が鳴いた。

「こら、何処へ行きをる？」と、鍛冶屋は、逃げ出さうとする悪魔の尻尾を、むんずと掴んで呶鳴りつけた。「待て、待て、まだ用は済まないぞ。おれはまだ、貴様にお礼をしなかつたからなあ。」

彼はさういつて、棒つきれを握りぎま、悪魔を三度打ちすゑた。すると哀れな悪魔は、まるでたつた今、役人に一と泡ふかされた百姓よろしくの恰好で、一目散に逃げ出した。とどのつまり他人ひとを誑ひらかしたり、罪に誘ひき入れたり、愚弄したりする、あの人間の敵が、あべこべに、まんまと翻弄されたわけである。

それから、ワクーラは入口の土間へ入るなり、乾草のなかへ潜もぐりこんで、午前ちゆう、ぐつすり寐込んでしまつた。やつと眼がさめた時には、もう疾とつくに太陽が高く昇つてゐたので、彼はびつくりした。俺は朝禱にも弥撒にも、寝すごして、よう詣らなかつたのだ

な！

そこで信心ぶかい鍛冶屋は、てつきりこれは自分から靈魂を滅ぼさうなどと、大それた考へを起した神罰のために、殊更こんなあらたかな祭日にさへ、寺へも詣られぬやうな眠りを神が課し給うたのだと思つて、しよげ返つてしまつた。だがその償ひには、来週、祭司の前で罪を懺悔することと、けふから向ふ一年間、毎日五十回づつ、床に額を打ちつけて謝罪の礼拝をすることにしようと思ひ、僅かに胸を安めて、家のなかへ入つて見たが、そこには誰もゐなかつた。明らかにソローハはまだ戻つてゐないらしい。

彼はくだんの靴を大事さうに懐ろから引つぱり出すと、その善美をつくした細工に眼をみはりながら、ゆうべの不可思議な出来事を思ひ出して、今更のやうに驚ろきに打たれた。手水てうづを使ひ、念にも念を入れて著換をして、例のザポロージェ人から貰つた衣裳を身につけ、長持の中からポルタワへ行つた折に買つて来たまま、まだ一度もかぶらない、新らしいレシエテイロフ産の毛皮帽を取り出した。また、これも同じやうに新らしい、五色染の帯を取り出した。それらの品々をひとまとめにして、鞭を取り添へて、風呂敷づつみにすると、真直にチューブの家をさして出かけて行つた。

チューブは、鍛冶屋が自分の家へやつて来た時にはびつくりして眼を睜つたが、しかも

その驚ろきは、鍛冶屋が甦がへつて来たことに対してなのか、それとも鍛冶屋がなんの憚る色もなく自分の許へやつて来たことに対してなのか、または彼がひどくめかしこんで、ザポロージエ人の服装などしてゐることに對してなのか、ちよつと見当がつかかなかつた。しかし、ワクーラが風呂敷づつみを解いて、つひぞ村では見たこともないやうな真まつさら更な帽子と帯とを彼の前へ差し出し、彼の足もとにひれ伏して、嘆願するやうな声で喋り出した時には、更に驚ろいてしまつた。

「おとつつあん勘弁しておくれ！　どうか怒らないでしておくれ！　さあ、ここに鞭があるだから、幾らでも心の済むだけ殴ぶつておくれ。俺の方からかうして鞭を差し出すだよ。俺は今もう何もかも後悔してゐるだよ。さあ殴ぶつておくれ。でも、腹だけは立てないでくれ。お前さんは死んだ俺の親爺とは仲善しで、いつも招んだり招ばれたり、差しつ差されつのお仲だつたでねえか。」

村ぢゆうに誰ひとり憚る者もなく、五哥銅貨や蹄鉄をまるで蕎麦煎餅かなんどのやうに片手で振ぢ曲げることも出来る、この鍛冶屋が、現在自分の足もとに平伏してゐる様を眺めて、チューブは内心ひそかに満悦でない筈はなかつた。それでも、これ以上、自分の威厳を墜すまいとして、チューブは鞭を取りあげると、ワクーラの背中を三つ殴ぶつた。「さ

あ、もう沢山ぢや、起つがええ！ 何時も老^{としより}人のいふことはよく聴けよ！ おらとお主^{ぬし}の仲のことあ、きれいさつぱり水に流さう。そこで今度は、お主の望みの筋を聴かうでねえか。」

「おとつつあん、おらの嫁^{よめ}にオクサーナを貰ひてえだよ！」

チューブはやや心に思案しながら、帽子と帯とを打ち眺めた。帽子は素晴らしい品で、帯もやはりそれに劣らぬ代物だった。彼は肚の中にソロハの不実を思ひ浮かべながら、きつぱりとして言つた。「善えだとも！ 仲人をよこしな！」

「あら！」と、鬨を跨ぎながら、鍛冶屋の姿を見つけたオクサーナは、思はず叫び声をもらして、驚ろきと歎びに両の眼を睜つたまま立ちすくんでしまった。

「さあ見てくれ、どんな靴をおれが持つて来たか！」と、ワクーラが言つた。「これこそ、女帝がほんとお穿きになる靴なんだぜ。」

「いいえ、いいえ！ あたし靴なんか要らないの！」と、彼女は両手を振りながら、男の顔から眼も離さずにつづけた。「そんな、靴なんかなくつたつて、あたし……。」「それだけ言つて、あとは言ひ得ず、彼女はぼつと赤くなつた。

鍛冶屋が間近く進みよつて彼女の手を執ると、美女は眼を伏せた。つひぞこれまでに、

彼女がこんなに美しく見えたことはなかつた。恍惚となつて鍛冶屋がそつと彼女に接吻すると、彼女の顔はひときはぼつと赧らんで、一段とまた美しくなつた。

*

*

*

ある時、今は亡き僧正猯下がデッカーニカを通られた折、この村の土地柄を褒められたが、往還を馬車で通り過ぎながら、急に一軒の新らしい民家の前で車を停めて、

「この美しく彩色いろどつた家はいつたい誰の家ぢやの？」と猯下は、戸口の傍に嬰兒みどりごを抱いて佇んでゐた美しい女に訊ねられた。

「鍛冶屋のワクーラの住ひでございます！」と、お辞儀をしながら、オクサーナ（それは他ならぬ彼女であつた）が、それに答へた。

「見事ぢや！ あつぱれな仕事ぢや！」と、猯下は扉や窓を眺めまはしながら言はれた。その窓はどの窓も、ぐるりに赤い色の縁がとつてあり、扉といふ扉には一面に煙管を銜へて馬に跨がつた哥薩克の姿が描いてあつた。

しかし猯下は、ワクーラがいつも寺の懺悔式に神妙につらなり、また、左側の頌歌席を

ば無料で緑色の地に赤い花模様を出して塗りあげたことを聞き知られた時には、更に更に賞讃の辞を吝まれなかつた。

だが、そればかりではなかつた。ワクーラは会堂へ入つたところの側壁わきかべに、地獄における悪魔の絵を描いた。それが如何にも気味の悪い姿だつたため、そのわきを通る時には誰でも、ペツと唾を吐いたくらゐであつた。で、女房どもは抱いてゐる赤ん坊が泣き止まないやうな時には、すぐに子供をその絵の傍へつれて行つて、『そうら御覧、あんな怖い鬼が描いてあるだよ!』と言ふのだつた。すると子供は涙を抑へてその絵を横目で眺めながら、母親の胸へ軀からだを擦りつけるやうにしたものである。

青空文庫情報

底本：「デイカーニカ近郷夜話 後篇」岩波文庫、岩波書店

1937（昭和12）年9月15日第1刷発行

1994（平成6）年10月6日第7刷発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本の中扉には「デイカーニカ近郷夜話 後篇」の表記の左下に「蜜蜂飼ルードウイ・パニコー著はすところの物語集」と小書きされています。

※「灯」と「燈」、「糸」と「絲」は新旧関係にあるので「灯」「糸」に書き替えるべきですが、底本で混在していましたので底本通りにしました。

入力：oterudon

校正：伊藤時也

2009年8月6日作成

2014年6月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ディカーニカ近郷夜話 後篇

VECHERA NA HUTORE BLIZ DIKANIKI

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 降誕祭の前夜

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>